
魔王のイメージアップのために異世界に召喚された話

uzu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王のイメージアップのために異世界に召喚された話

【Nコード】

N8718R

【作者名】

u z u

【あらすじ】

「この世界の人達と仲直りしたいんだけど、手伝ってくれない……？」「……………は？」偏差値50な高校生、山下総夜は学校の帰りに怪しげな男に取り押さえられて異世界に連れ去られてしまう。魔王を倒す的な展開になるかと思えば自分を召喚したその張本人こそ魔王（最近のマイブームはポケモン）だった。そんなわけで魔王イメージアップ大作戦のため異世界で頑張る羽目になりましたと。めでたしめでたし。「って全然めでたくねえ！！」

魔王

気がついたら、変なところにいた。

いや、変なところなどという曖昧な表現は良くない。俺は体を起こして辺りを見回す。

牢獄。

この場で一番的確な表現だ。しかも刑務所のような設備や掃除の行き届いたものではなく、洞窟に無理やり鉄格子をはめ込んだような造りの。見渡す限り、俺の牢獄と同じような造りの部屋がどこまでも続いている。しかし、辺りは無人だ。俺意外誰もいない。

「何これ？」

言ったところで答えは返ってこない。

とりあえず一番新しい記憶を探してみる。すると驚くべきことに、俺は学校からの帰り道、怪しい男に捕まっていたことが判明した。黒づくめだったので顔は見えていないが180cmはある大きな体をした二人組みだ。そして今に至っている。

なるほど、俺は誘拐されたのか。

しかし、犯人が見当たらない。それに、鉄格子は何とかすれば抜けられそうだ。間抜けな犯人に感謝しなくてはならない。

「逃げよう」

即決だ。もちろん当然だ。悩む必要なんてない。逃げるのが最優先である。俺は肋骨の悲鳴を無視して体を押し込んだ。(コンプレックスでもあるので言いたくないのだが、身長は175あるものの)俺は肩幅が狭かったりしているので、どうにかして通り抜けることが出来た。

「ちょっと、ちょっと。困りますよ、逃げたりなんてしたら」

ビクンツと体が震えた。男の声だった。恐る恐る振るかえると、そこには……。

えっと、そこには……。ええっと……。

「あの、どちら様ですか？　っていうか……何ですか？」

「魔王の使い、悪魔です」

「……は？」

骨格ベースは人間と似ていて背丈は俺より少し高い。しかし、顔は狼と酷似している。服装は深緑と黒の燕尾服。そして、これが一番注目すべき点だ。

黒い羽が生えている。

「病院行かれたらどうですか？　いや、あなたの頭がおかしいとかそういう意味ではなく。善意といいますが、ほんとに心配してるって言うか」

「お気持ちお察しします。混乱しているかと思いますが、やましたそ山下総うや夜様は異世界に召喚されました」

悪魔と名乗る人物は頭をぺこりと下げた。顔には悲壮感が漂っている。

「ほんとに、すみません。自分も反対したんですけどね……」

俺の頭がフリーズした。

“イセカイ” “ショウカン” サレタ？

「嘘でしょ？」

「マジです」

「はあああああああ！！！！？」

異世界って、異世界？ 異なる世界と書いて、異世界？

いや、漢字のことなんて今はどうだって良い。

「なんで？ だって俺、普通の高校生なんですけど……」

「あなた様にはたくさんのお友達がいらっしやいますね？」

悪魔は悲しげな表情こそ変わらないが説明してくれた。

「魔王様はあなた様のような明るく誰からも好かれる方をお捜しだったのです。もちろん、異世界にいらっしゃる方限定で」

「ま、待つて！ 別に俺、そんな友達とか多くないですつ。普通の高校生っていうか、偏差値50っていうか。普通なんですよ！ただの普通の高校生！」

悪魔は待つてましたと言わんばかりに目を見開き、妙に説得力のある大きな声で言った。

「そこです！ あなた様のその言葉を待つておりましたつ。あなた様は友達の数も明るさもすつごく普通！ 先ほどはちよつと褒めてみただけです。 ともかくあなた様は超普通、メガ普通です！！」

あれ？ なんてだろう、目の前が霞む。

「それこそが、あなた様の武器！ それこそ魔王様が欲しているものの一つなのです！！」

普通が武器？

「どういう意味ですか？」

悪魔は俺の質問には答えず、人差し指（は普通の人間のだ）を立てて横に振った。腹が立つような演技がかった動作だ。

「これ以上は教えられませーん。とりあえず、私について来てください」

「はあ……」

俺は仕方がなく、悪魔の後ろについて行く。逃げようかとも思ったが、悪魔相手に逃げられる気もしないのでやめておいた。悪魔の後ろに高校生。なんだかとても奇妙な光景だ。

「……です」

悪魔はある扉を指差した。牢獄が永遠に続くかと思われたこの洞窟だが、一番奥には鋼鉄で出来た扉があった。扉の真ん中には【魔王の部屋】と書いてある。

「魔王に会えと？」

んな無茶な。しかし、悪魔は心配要らないといって紙を手渡した。

「注意事項が書いてあります。これを守ってください」

注意事項

以下のことを守れ

1、魔王に対して暴言をはかない

(例)「いい加減部屋から出てきなさい」「ニート」「きもい」など

2、魔王の趣味に口を出さない

(例)「なんですか、このポスター?」「え、ポケモンとかやるんですか!?!」など

3、魔王が凹むことをしない

(例)「妙にテンションを高くする行為」「偽りの愛の行為」など

以上のことを守る者に入室を許可する。

B y 魔王

「って、作ったの魔王かよおおお!!」

自作!?! っていつか魔王ポケモンやんの!?

つか、偽りの愛って何があっただよっ魔王!!!

色々突っ込みどころが満載すぎる、これ。しかし悪魔は俺の突っ込みも待たず、扉を開く。

「魔王、失礼します。総夜様の目が覚めました」

中は小さな部屋だった。魔王の部屋なのだから大きな部屋で、中心には王様が座るような椅子や、危険そうな武器があるのかと思っただ、俺の想像は一瞬で瓦解した。魔王の部屋は薄暗く、あるのは大画面パネルの液晶からもれる光だけ。地面にはケールやコードやらが張り巡らされていたり、レトルトらしきものの食べ散らかしが目立つ。

完全に引きこもりの部屋じゃん……！！

液晶の辺りでなにやら影がもぞもぞと動く。悪魔が何やら呪文を唱えると部屋が明るくなり、俺にもその姿が見えた。

「どうも、魔王です」

「……………は？」

俺には魔王と名乗る人物が小学生にしか見えなかった。くりくりの緑の目に、茶色い髪。テレビとかで見る、外国の子どもタレント、そんな例えがぴったりだ。

「あなたにお願いがあります」

舌たらずな変声期前の声で魔王は淡々と言った。

「僕とこの世界に住まう人とを仲直りさせてください」

「は？」

[illegible]

とりあえず、俺はコードを踏まないように気をつけながら魔王の前に座った。魔王は律儀に座布団をだしてくれた。ビビりながらも俺はそれを使わせてもらっている。悪魔はそのまま、その場に正座した。俺もとりあえず悪魔にならない正座しておくことにした。

「僕ね、昔すつごく悪いことしたんだよ」

まあ、魔王ですからね。

「そしたら、友達がなくなっちゃってさあ……」

まあ、しょうがないですね。

「でさ総夜君みたいな普通な人に、どうすれば僕も普通になってみんなと仲良くできるのか、教えて欲しいんだ!!」

いや、だから何でそうなるの！！

「は、はあ……」

話をまとめるに、改心したこちらの魔王はみんなと仲良くなりた
いが、周りは冷たい（当然だ）。しかし、自分は友達が欲しい！
改心した自分のことを理解して欲しい！ とのことらしい。

魔王は笑顔をこちらに向ける。顔は子どものそれなので、とても
健全だ。

「封印されたときにこんな風に無理やり姿も変えられちゃったし。
僕は前みたいに怖そうじゃないし、今の姿なかなか気に入っている
んだ。けど、自信なくてさ。周りも僕が変わったこと知らない人ば
っかりだし。怯えられちゃってさ……」

「お勞しゅうございます！ 魔王様！！」

悪魔はワンワンと泣き始めた。それを見た魔王は悪魔の背中を優
しくさする。

「いいんだ、それも今日で終わりだ。さあ総夜君、普通の秘術を教えてくださいたまえ！」

「……………いや、別にないです」

魔王と悪魔はハンマーで殴られたかのような表情で固まった。

もしかして俺、悪いこと言ったかな？

冷や汗が出てくる。魔王の機嫌を損ねたのだ、もしかしたら八つ裂きにされるかもしれない。それだけは勘弁だ。

しかし、魔王と悪魔の次のリアクションは俺の予想に反するものだった。

「そっか……。やっぱり無理だよね。魔王のイメージアップなんてさ」

「魔王様。どうか気を落とさず、魔王様には一生私がついてゆきますっ」

「いいんだ。ちょっと、悲しいだけさ」

魔王と悪魔は目に見えるほど落ち込んだ。なんだか、俺がとんでもなく酷いことをしたように感じてくる。魔王は俺のほうをチラリと見て、かすれるような声で言った。

「もう帰りますか？ 勝手に召喚したりしてすいません。でも、あちらの時間は止まったままですから、心配ないです」

「……………」

魔王の目は落ち窪んでいた。姿かたちは子どもでも、その中身は何千という時を生きた魔王なのだ。そこには老いさえも感じられた。長い年月で自らの過ちに気付き、反省をする。しかしそのときにはもう遅い。後は墮落したように死を待つのみである。

俺には魔王がそんな死に際の老人のように見えたのだ。

「何か俺に出来ることはないんですか？」

気がつくとなんな馬鹿なセリフを俺は吐いていた。涙目だった魔王と悪魔は顔を上げると、花が咲くように笑顔になった。

「いいのですか、総夜様!!」

「ほんとに!? 手伝ってくれるの?」

一度言ってしまったものは仕方がない。男に二言は無しだ。

「やれる範囲で、ですけど」

かくして、俺の魔王イメージアップ作戦が始まった。

魔王（後書き）

心理テストの結果がことごとく悲惨
U Z U です（・-・*）

感想やアドバイスをお待ちしています（-人-。
お気軽にどうぞ（・-・）ノ

パーティが出来ました

「じゃ、ゆすは柚羽ちゃん呼んでくるね！！」

魔王はそういうと奥にあるもう一つの扉を開ける。

柚羽ちゃん？

まさか、俺以外にも召喚された人がいたのか！？

「はじめまして、すずくがわ朱雀河原柚羽です」

奥の部屋から出てきたのは、可愛いデザイン制服を着た女の子だった。栗色っぽい髪に手足が長く、スタイルはモデル級だ。鼻筋も通っていて肌は白く透き通っている。凛とした雰囲気身にまとい、どこか人間離れた印象を与える人だ。

「山下総夜です。どうも」

朱雀河原さんは表情を変えず丁寧に一礼をしてくれた。どこぞのお嬢様なのか躰が行き届いているようだ。朱雀河原だなんて大そうな苗字なのだ、どこぞの大企業の娘に違いない。

朱雀河原さんの表情は硬く、無表情だ。美人なのだから笑えばいいのに。なんて余計なお世話か。

もしかして、不機嫌なのか？

「柚羽ちゃんは、カリスマなんだ」

「カリスマ？」

「総夜様は普通を追及して呼ばれた人材ですが、柚羽様はカリスマを追求して呼ばれた人材なのです。具体的に言うなら、人気者ってわけですね」

悪魔の話によれば、この朱雀河原さんは東京の中でも屈指の名門女子高に所属しているらしい。勉強も運動もパーフェクトで誰に対しても敬語を使う。人を選ばず誰に対しても誠実な人柄から校内で

も頼りにされ、彼女の陰口を言う人は全くといっていいほどいないらしい。誰からも好かれ、友達になりたいと思わせるような人柄。そこを魔王は気に入ったのだ。

「人気者だなんて、照れます。私はただ普通に生活しているだけです」

無表情なままそう言う。どうやら不機嫌なわけではなく、この無表情は彼女のスタンスらしい。

「ともかく、好かれやすい普通と好かれやすいカリスマがそろったんだ！ 作戦会議と洒落込もうじゃないか」

魔王と悪魔、俺と朱雀河原さんは円を描くように座る。

「じゃ、僕のイメージアップのための作戦を思いついた人、挙手！」

いや、無理だろ。

男に二言はないと言いながらも、俺はなんだか乗る気が失せてきた。もともとその場の乗りで言ってしまっただけだし。朱雀河原さんみたいな人気者がいるのなら、そちらだけで十分だろう。普通の出る番はない。

案の定、朱雀河原さんはすぐに手を上げた。

「はい、柚羽ちゃん」

「魔王さんが改心なさったことを国々を回り宣伝していくというのはどうでしょうか？ たえば困っている人を助けてあげたりだとか、国の抱える問題を解決するとか。そうすれば、魔王さんが改心したという噂が国中に広まります」

なるほど。具体的に効果のありそうな方法である。魔王も同意見なのか、深く感銘を受けた顔をしている。しかし悪魔はどこか困った顔だった。

「しかし魔王様は、ほとんどの国から入国禁止令が出ております。それ故、そのような作戦は……」

残念ながらそれはできないらしい。うむ、残念である。俺はもう完全に他人事として聞き流すようにその話に耳を傾けていた。しかし次の瞬間、俺は本日二度目のバグを起こした。

「では、私が行きます。魔王さんの本当の姿を皆さんにお伝えします！」

無表情だがどこか熱のこもった声で朱雀河原さんはそんなことを言った。俺は耳を疑った。

「正気ですか！？　だって異世界ですよ！？」

失礼な言い方だが、朱雀河原さんは世間知らずのようだ。俺の反論にも物怖じしない。

「同じです。心をこめて誠心誠意努めれば必ずや魔王さんにもお友達は出来ます」

「柚羽ちゃん……。僕、嬉しいよ！」

「任せてください」

どうやら話はまとまっただらしい。

「じゃあ、俺は帰ってもいいですよな？」

朱雀河原さんとは違い俺は普通の人間だ。異世界で人助けなんて無理に決まっている。というか助けて欲しいのはこちらのほうだ。彼女には悪いが俺は帰らせてもらおう。

「何馬鹿なことをおっしゃるのですか、総夜様。女性を一人で冒険に行かせる気ですか？」

俺を見咎めるように悪魔が言う。

「いや、まあ確かにそうですけど。俺、普通の高校生ですし。俺は朱雀河原さんとは違って、別に勉強も運動も得意でも不得意でもなくて、そういうことには向かないと思います。っていうか無理です、絶対」

本音を言うなら、面倒ごとに巻き込まれる前に帰りたい。しかし魔王は、俺の気持ちも汲まず笑顔だった。

「それなら大丈夫だよ。異世界で生き残るための力なら、与えてあげる」

「本当ですか？ でしたら、私魔法を使ってみたいです」

朱雀河原さんは真面目な顔でそのようなことをいう。心なしか瞳がきらきらしているように見える。

「もちろんだよ。僕の力を分けてあげるから」

「ちょっと、俺の話聞いてます？」

「でしたら格好も変えなくてはなりませんね。制服じゃ目立ちます」

「そうだね。どんな感じがいい？」

「あの、俺の話……」

「動きやすい格好がいいですね」

「靴も動きやすいのがいね」

「防寒もふくめブーツの方がよろしいかと」

聞いちゃいねえ……。

[illegible]

俺は魔王に魔法をかけてもらい、魔法使いになってしまった。元高校生、現魔法使い。なんだそれ。自分のことだが笑えてくる。魔法も並には使えるらしいが、使っていない。魔法は人に向き不向きがあり、火や水をはじめとした様々な能力から自分に合ったものをセレクトしてもらった。しかし、俺の能力は変わったものだった。

ブラック・ボックス

それが俺の能力らしい。俺の手に触れた人物を異世界に転送出来

る能力だという。ただしどこへ行くのかは全くの不明。生物ならばどんなものでも異世界に転送させてしまうという非常に面倒な能力で黒い手袋が必要不可欠だ。そうそう、手袋ついでに俺の格好だが、まあ説明する必要もない。FFとかDQとかの格好、詳しく言えば紺の質の良い布で出来たローブに黒革のトレッキングブーツ。腰にはもちろん剣と銃がさしてある。

「山下さん、元気がありませよ」

朱雀河原さんだった。ゲームの主人公のような可愛らしくも防御もかなった格好をしている。白を基調とした服には赤いラインが入っていてカッコ可愛い。腰には短剣を二つさし、手首には幾重にもバンクルを重ねている。

「総夜でいいよ。同い年だと思うし。俺は高二」

「では、私も袖羽で構いません。私は高校三年生です」

「え、先輩!？」

「敬語は使わなくて結構です」

「いや、でも……」

柚羽さんは、顔を俺に近づける。眼が大きくて、肌が白い。って、何見てるんだ俺は！！

「敬語は使わないでください。柚羽さんや、柚羽ちゃんは私がつとも忌み嫌う言い方ですので、絶対に口にしないでいただきたいです」

どうやら俺は脅されていたらしい。しかし、美少女に顔を近づけられても何の脅しにもならないということと彼女が自覚していない。俺はどきまぎしながら答えた。

「じゃ、じゃあ柚羽で。よろしく」

柚羽はうなずくと、俺から顔を離れた。何か“さん付け”されることに嫌な思い出でもあるのだろうか。

「ところで、総夜さ……。」「ほん」

どうやら柚羽は他人を“さん付け”なしで呼んだことがないらしい。しかし、相手に呼び捨てを求めたからには自分もそれに答えなくてはいけないと思っているのか、少し緊張したような面持ちで続ける。

「ところで、総夜は！ 何の力をもらったのですか？」

名前はクリアしたが、敬語は抜けないらしい。別にそこまで無理して頑張らずともいいのに、とつい思ってしまう。なぜそこまでするのだろうか。

「別にいいよ。さん付けなくすだけでも、十分だから。無理しないで」

柚羽は無表情だが僅かに頬が赤くなった。無表情な彼女からすれば大した変化である。

「申し訳ありません。実は私、変わりたいのです……」

「変わりたい？」

俺の目からすれば彼女は十二分にできた人間のように見える。

「はい。私はあの人の操り人形にはなりたくないです……」

あの人？

何のことだかさっぱりだが、柚羽が燃えていることに水を差すのも無粋に見えたので、何も言わないでおいた。座布団の上で魔王は柚羽に向けて拍手をした。もしかしたら魔王はあの人のことも事情も知っているのかもしれない。

「すごくカッコいいよ、柚羽ちゃん。で、質問の答えだけど、総夜君は剣と銃の力、柚羽ちゃんには魔術師の力をあげたよ」

魔術師とは、俺のブラック・ボックスのように一つの能力に特化しているわけではなく、全ての魔法において高水準な能力を持った者のことらしい。それでも得意、不得意があり、柚羽はホワイトアウトという冰雪系の魔力が強いらしい。

「でも、さすがに二人だけって言うのは不安だよな。道も知らないし、この世界の文化とかも分からないだろ」

「それなら平気。君たちを選んだのは二人の住む世界が、この世界と文化が似ているからだっただ。特に日本ジャパンだね」

「お風呂とか、ご飯とかですか？」

「そうそう。言葉はちょっといじらせてもらっただけ、ベースは似てるの。それに道の心配は無用！」

そついうと魔王は指をパチンと鳴らす。薄黄色の煙が爆ぜたかと思うと、そこにはネズミがいた。ネズミというよりはハムスターの太った奴と言った方がしっくりくるかもしれない。長靴を履いた猫みたく、長靴と貴族っぽい豪華な服を着ていて、なんとも愛くるしい大きな赤い目に、艶々のグレーの長い毛がなかなか可愛い。

「チーズ伯爵。僕のペットだったんだけど、貸してあげるね」

そのネズミ、もといチーズ伯爵は胸を偉そうに反り、俺の方を見た。

「チーズ伯爵だ。魔王様の命により、お前達の道案内をしてや

」

馬鹿そうなチーズの目に柚羽の姿が映る。するとチーズは小さな腕を広げて柚羽の足元に抱きついてきた。

「なんとお美しい方なんだああああ！！！！　お、おおお、俺とお付き合いたいしてください」

柚羽はそれを一瞥すると、感情に乏しい表情のままこう言った。

「総夜。これは何でしょうか？　装備ですか？」

「んなわけねーだろ！　おい、その足から離れる馬鹿チーズ！」

「なあーにが馬鹿チーズだ！　伯爵と呼べ！」

「チーズさん。離して下さい」

「はい」

チーズはあっさりと柚羽の足から離れる。

おいおい、前途多難すぎるんだけど……。

「彼なら道も良く知ってるし大丈夫。でも小さい悪魔だから上着を脱ぐと羽が見えちゃう。だから気をつけてね。街の人がそれを見たらびつくりすると思うから」

「わ、わかった」

何か不安が募るばかりなのだが……。

「じゃ、習うより慣れろ！　いつてらっしゃーい！……」

「では、行ってまいります」

「柚羽のことは俺が守ります。魔王様！」

「大丈夫なのか、こんなパーティで……」

かくして、俺達の“魔王のイメージアップ”という名の冒険が始まった。

パーティが出来ました(後書き)

「いつから、そこにいたの？」ってよく言われます
UZUです(・・・*)

感想やアドバイスをお待ちしています。(- 人 -)
お気軽にどうぞ(・・・)()ノ

白銀と黒い箱

俺達は今、洞窟から出て山を下っている。辺りは木が茂っている。俺達はひたすら獣道を歩いた。天気は良いのでハイキングと思えば、そう辛くもない。

「とりあえず、ここを降りて町に行かないことには始まらないぞ！ どうした総夜もう疲れてるのか！？」

チーズは俺のはるか後方からそう叫んだ。息は絶え絶えで顔には汗がたらたらと流れている。

「いや、疲れてるのお前だろ！ 足引っ張るんじゃないよー！」

仕方なくチーズは俺が負ぶっていくことになった。体長は十五センチ定規くらいだが、見た目以上に重い。腹の中に鉛でも詰まっているのだろうか。俺は不満をメタボネズミにぶつける。

「チーズ、重すぎるだろっ」

「チーズじゃない。伯爵と呼べ」

「つつ。……………」

突っ込む体力も惜しいので俺はもう何も言わなかった。前に行く
柚羽はいつも通りのポーカーフェイスでぐんぐん進む。俺もその横
を歩く。魔王が力を与えてくれたからか基礎体力が上がっている気
がする。いつもの自分なら、もうチーズのような状態になっている
ところだろう。少し苦しいが休むほどもなかったので歩き続けた。

「おい、何か臭いがするぞ」

背中にいるチーズが急に声を発した。

「何の臭いですか？ 秋刀魚？ それとも松茸？」

「いや、柚羽それボケてんの！？」

俺の突っ込みはスルーされた。柚羽はどうやら天然らしい。

もちろん、臭いの正体は秋刀魚でも松茸でもない。

「オーガだ」

辺りの林が揺れ始め、ブルドーザーみたいな巨大な熊が四頭現れた。鋭い鎌爪と赤い瞳。漫画やゲームでよく見るあれだ。トブ川のような薄汚い毛から鼻をつく悪臭が漂ってくる。

いつもならば一目散に駆け出すところだが、今の自分には魔法や剣がついている。

「腕ならしのいい機会だな」

俺が言つと柚羽は神妙な顔つきでうなずいた。

「では、二頭ずついきましよう」

その言葉を合図に、俺は剣を抜きオーガの元まで走る。剣術なんて、せいぜい中学の剣道でしかやっていない。しかし、魔王の魔法のせいなのか体に染み付いているように簡単に筋肉が動いた。

鍵爪が俺めがけて飛んでくる。俺はそれを横つ飛びに回避する。その隙を狙い右足に剣を突き刺す。痛みに唸るオーガ。

なんだ、意外といけるじゃん。

もちろん自分の力ではないことは重々承知である。しかし、なかなか味わえる体験ではない。俺は素直に感激した。ゲームの主人公にでもなった気分だ。

しかし、オーガの追撃は続く。俺は前転したり、高く跳んだりしてそれをかわす。

そこでふと思う。あの技を使ってみようと。

「ブラック・ボックス」

相手を異世界に飛ばす能力。

俺は剣を持っていない左手の黒い手袋を取り、隙を見て高く跳ぶ。オーガの硬い毛が生えた背中に手をつける。

「吹っ飛べ!!」

オーガの足元が黒くなる。正方形になったそれは、オーガを中に
入れた状態で壁と天井を作り始め、オーガを箱詰めにしてしまう。
オーガと俺はそれを終始、ぽかんとした表情で見ている。

俺の手と膝はオーガではなく、箱の天井に触れていた。天井が完
成したので、完全にオーガの姿が見えなくなる。すると次は黒い箱
の至る所が見えない彫刻刀で彫られていくように凹凸が出来始める。
草花だろうか？ よく分からないが絵のようなものが左右対称に書
かれていく。

その動きが止まると、オーガと黒い箱は共に消えた。箱が消えた
せいで俺は二メートルほどの高さから落ちた。別に痛くはなつた。
それよりも目の前で起こった、ではなく俺が起こしたことの方が衝
撃的だった。

今までここにあったものが跡形もなく、この世界から消えた。

「すっげえ」

俺の背中からチーズがそう言った。しかし俺は素直に褒められて

嬉しい、とは思えなかった。何というか後味が悪い。正直に言うなら、少し怖い。生々しい黒い箱のせいだろうか。

どこかへ飛ぶ。自分の見知らぬ世界に吹っ飛ばされる恐怖は誰より良く知っている。オーガのような獰猛な野獣に同情できるほど俺は出来た人間ではないが、この技は慎重に使わなくてはならないだろう。

それに、もし転送先が自分に合っていなければ生きて地獄を見ることになるかもしれない。不思議なことに、生きるというのは死ぬよりも辛いことで満ち溢れている。それくらい十七年生きてきた俺にだってわかる。もしも自分と意思疎通ができるものがない世界に飛ばされたら、兎じゃなくなつて俺は寂しくて死ぬかもしれない。

あの黒い箱はまるで棺だ。

これだつたら普通の火とか水とかの力のほうが良かったな、と少し後悔もした。

「ホワイトアウト!!」

柚羽の声がする。見ると、柚羽はオーガ三頭を相手取っていた。柚羽の言葉を合図に、足元に古代文字っぽい文字の羅列で出来た円が出来上がり、それが光ると青と銀の大きな鳥が現れた。体長は俺を一回り小さくさせたくらい。鋭い嘴に薄い青の羽。周りはきらきらと銀の塵が舞っていて幻想的だ。

鳥は美しい羽を広げて風をおこす。銀のダストがそれに乗り、敵のほうへと流れる。ダストは絡みつく紐のように相手にまとわりつく。オーガ三頭は必死にもがくが逃げられない。

「氷結！」

それを合図に銀のダストは動きを止め、オーガごと氷らせた。文字通りの氷結だ。しかしオーガも負けてはいない。氷づけにされても意識はあるのか、目を動かしたり必死に動こうとしているのが見て取れた。このままでは、氷が割れて中から出てきてしまう。

パチン。

柚羽は指を鳴らす。すると氷に規則正しくひびが入り、割れる。それは分子レベルで粉々にされたのかその場には何も無い。俺の目にはオーガも氷もない。銀のダストだけがそこに何かあったことを伝えている。

つまり、オーガごと分子レベルで粉々にされてしまったのだ。

改めて考えると中々恐ろしい魔術だ。しかしやっぱり俺はオーガに同情できるほど出来た人間ではないので、哀れみよりも俺の相棒

への恐怖心の方を強く感じた。敵に回してはいけない、とはこういう部類の人間を指すのだろう。

「二頭ずつなのに、三頭やつつけられたな」

チーズは俺の左肩でニヤニヤと嘲り笑う。確かにそうだが、俺としては積極的に戦いたいわけではないので別に構わなかった。しかし美人で運動も出来るとはいえ、女性にこのようなことを任せてしまうのは些か申し訳なかった。

「総夜、怪我はありませんか？」

「平気。袖羽は？」

「問題ありません。でも、なんだか少し体が重いですね」

言われてみるとそうだ。なんだか体が酷く重たく感じる。

「それは魔法を使ったからだな」

チーズはこともなさに言う。俺は眉を寄せた。

「どういうことだよ？」

「魔法は二十四時間で使える回数が決まってるんだよ。柚羽のホワイトアウトは一日五回が限度だ。あのでっかい鳥を召喚させたり、簡単な初歩魔法なら数に入らないが“解凍”ができるのは五回までってことだ」

「馬鹿！　そういう大事なことは早く言えよ」

ということは、俺達は残り四回しか大きな魔法は使えない。

「いや、お前はもう無理だ」

「え？」

「お前のブラック・ボックスは馬鹿でかい魔力を使うんだよ。もうお前は初歩魔法しか使えない」

「だから早く言えって！！　チーズフォンデにするぞ！！」

俺 魔法残り0回

前途超多難。

白銀と黒い箱（後書き）

少年漫画が好き

U Z Uです（・-・*）

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。

感想やアドバイスをお待ちしております。（-人-）

お気軽にどうぞ（・、・）ノ

相席相手

森を抜けて、街に出た。もちろんその街というのは俺が今まで見ていた高いビル群ではなく、可愛い絵本から抜け出したような家々だ。レンガ造りの道に大きな時計台。ミニチュア模型やゲームでしか見たことない風景に俺は心躍らせた。

「すっごー」

出てくる言葉はこんなものしか出てこない。柚羽も同じ意見なのか、こくりと頷く。

「とりあえず、この街から始めるか」

とチーズは言う。魔王のイメージアップ、今さらとは思うが不安である。上手くいくのだろうか。いや、いくはずがない。

「とりあえず困った方を見つけないではなりませんね」

「そうはいつでもない。とりあえず寝床を探そう、お腹も減ったし」

「ですね」

街の中は賑わっていた。パン屋の大声や道を走り回る子供達の元気な声が聞こえてくる。チーズの説明によると、ここはラインディルという田舎町だという。絹や糸の産業が盛んだが、穏やかな人が多いことから経済発展はしていない。

「おい、外に出るなっていったろ！」

「離してよ！ 私だって遊びたいの！！」

道の真ん中で小学生くらいの男の子と女の子がもめている。兄妹だろうか、同じ薄茶の髪をしている。周りの雑踏はただの兄弟喧嘩としか思っていないのか目も向けない。俺達は何となく目に入ったそれを見ていた。

「言うことを聞かないと、魔法を使うぞ！」

兄の方が脅しにかかる。というか、子どもでも魔法を使えるのか。知らなかった。

「何よ！　じゃあ、私だって……。ライトニング！」

初等魔法の一つ。弱い雷を起こす呪文で、一様俺も使える。

残念ながら妹の攻撃は年の差なのか兄の戦闘センスが良いのか、兄には通じなかった。妹が放った一メートルほどのミニ稲妻は一瞬で消える。

「ファラデーケージ！」

電気系統の魔法を無効化する呪文のようだ。稲妻は地面にのめり込むように消えた。これは俺が使えないので、恐らく初等魔法ではない。どうやら彼は電撃系統に対する反魔法を十八番とするらしい。

「総夜。私達はあれを止めるべきではないのでしょうか？」

「えっ。でも兄妹喧嘩なわけだし、口を出していいのか……」

といいつつも俺は二人の間に入る。仕方がないだろ、柚羽の視線が痛いんだ。柚羽は俺から少し離れたところから様子を伺っている。人に頼まずお前がやれ、と言いたかったが止めておいた。俺は額に軽く汗をかきながら、必死に宥める。

「まあまあ。何があつたのかは知らないけど、道で魔法を使うのはあまり良くないと思うよ」

我ながら、かなりおどとした宥め方である。兄妹が明らかに不審者を見る目付きで俺を見る。

「お兄さん、誰？ 旅の人？」

「あっ、そうそう。旅の人！」

「ふーん。で、何で僕らの言い争いに旅の人が文句を言うの？」

どの世界も子どもはムカつくと決まっているのか。俺は純度百パーセントのイライラを強く感じた。しかし、ここで怒ってはいけない。とにかく話を変えよう。頑張れ、俺。

「え、えっと。お兄さん、食べるところを探してるんだけど、どこがある？」

黙っていた妹が可愛らしい小鳥のような声で言う。

「だったら、うちに来る？ お母さんの作るオムレツ、美味しいよ」

オムレツか……。魔王の言うとおり食文化が似ているらしい。

「実は、もう一人お姉さんと、うるさいネズミがいるんだけど良いかな？」

そういつて後ろに隠れるようにしていた柚羽と俺の背中に張り付いていたチーズを見せる。

「いいよ！　みんなで食べたほうが美味しいもん！」

邪気がない笑顔でそういう。俺には十歳くらい離れた年下と触れ合う機会なんてほとんどなかった。子どもなんてうるさくて面倒で生意気。そう思っていた自分の考えを改めなくてはいけないかもしれない。

「よし！　じゃあ行くぞ！」

兄を先導に俺達は道を進んだ。横を歩く柚羽がたずねた。

「私は柚羽と申します。こちらが総夜。この可愛らしいのがチーズです。お二人のお名前は？」

「俺は、セドリック・カーター」

「あたしはサラ！」

聞くとセドリック達は宿屋の子どもらしい。ついでだ。宿もそこで取ってしまおう。

「ここだよ。おかーさん！ お客さんだよー！」

年季の入った扉をセドリックが開ける。中は古びた洋館のような造りで、古めかしいこげ茶の板張りが味を出している。中にはいくつか大きな長机が置かれていて食堂のようになっていた。その奥に階段があり、恐らく二階が客室なのだろう。セドリックの母親は食堂のカウンターテーブルのようなどころで他の客と雑談していた。セドリックの声で振り向く。

「サラ！ もう、心配したんだから！」

母親はサラの元まで走るとギュッと抱きしめる。潰れてしまうのではないかと思ったが、案外子どもは丈夫だった。

「あんたは体が弱いんだから、外で遊んじゃ駄目っていったでしょ！？」

「ごめんね、ママ」

サラの顔に反省の色は全く見えない。につこりと笑っただけである。まあ、遊びたい盛りだし、気持ちはよく分かる。一息つき、セドリツクが俺達のことや宿に泊まりたい旨を説明してくれた。

「もちろんいいさ。あんた達がサラを連れ帰ってくれたようなもんだしね」

恰幅がよく歯並びが綺麗な人だ。人が良さそうで大阪のおばちゃんっぽい。もちろん格好は虎柄ではなく、ファンタジーティストとなっている。

「さ、座って座って。オムライスでいいかしら？」

俺達の返答を聞かず、カーターさんは食事を作りに行ってしまった。取り残された俺達は仕方なく食堂の椅子に腰掛けた。十人掛けくらいの長い木製で出来た椅子だ。なかなか人が多いので相席させてもらうしかなさそうだ。

「すみません、隣いいですか？」

俺は黒い服を着た男に尋ねた。男の年は俺と同じくらい、だいぶ若いな。カラスのような黒のローブには軍のものと思わしきブルーのリボン。勲章が何かだろうか。黒い髪はどこか懐かしい。日本を思い出すからだろう。男は席を詰めてくれた。

「構わない」

「あ、どうも」

「お二方も旅の人かい？」

黒い男の仲間だろうか、限りなく白に近い金髪に長い耳。いわゆるエルフとかいう奴だろう。儚いというか、この世のものとは思えないというか。確かに袖羽も美人だと思うが、このエルフはバックに花が見えるような迫力がある。白い服には黒い男と同じくブルー

のリボンが胸の辺りに付いている。

「あ、僕の名前はレイフィールド。レイでいいよ」

「私の名前は柚羽です」

「俺は総夜」

「チーズ伯爵だ」

レイと名乗るエルフと握手をする。白魚のような手とはこういうのを言うのか、と思うくらいの綺麗な手だ。

「お前ら本当にそういう名前なのか？」

唐突に黒い男がそう言った。俺はぎくりとした。確かに、怪しまれても無理はない。それと同じことを俺もセドリック達に名乗るときに思った。俺らの名前は浮いてる。文化の違いを直すなら名前も変えておくべきだったか。しかし、言ってしまったものはしょうがない。適当に理由を取り繕おう。

「えっと。僕らは辺境の土地から来まして。ちょっと変わった名前なんです」

なるほど、といって黒い男はクスリと笑った。

「俺の名前は水城遊みずきゆうだ」

「！」

黒い男は唇の端をにたりと吊り上げる。

「あんた達と同じ、辺境の土地、日本から来た」

「どういふことだよ……」

俺達の他にも召喚された人がいたのか！

だけど、いったい誰が何のために……。

「俺は北の国の王に召喚された。魔王の残党を殲滅する手伝いを
する羽目になり、一ヶ月ほどこの世界にいる」

ん？ あれ？ 今、魔王がどうとかって言わなかったか？

無表情だが、目をいつもより見開き驚いた様子の柚羽が尋ねる。

「つまりは、勇者様ということでしょうか？」

「まあ、そう言うのかもな」

柚羽。

「……………」

俺。

「.....」

チーズ。

「.....」

こんにちは、魔王の残党です。

相席相手（後書き）

かまぼこの焼いてある薄い皮がすき

U Z Uです（・-・*）

感想やアドバイスをお待ちしています（-人-。
お気軽にどうぞ（・-・）ノ

勇者VS俺

これって、かなり不味いんじゃないだろうか。俺は助けを求めるように目線を柚羽に向ける。相変わらずのポーカーフェイスだ。焦りの色ない。一方チーズは汗をだらだらと流し俺の肩で縮こまっている。

どうするよ。俺っ！！

「そうなんですか。私達は魔」「人助けです！！！」

あつぶねええええ！！！！

柚羽が天然だということを忘れていた。俺の目は緊張と興奮できっと血走っているだろう。

「今、ボランティアで回ってるんですよ！ 何でも召喚した人がそういう、優しいっていうか穏やかな人でして。人を助けまくったら帰らせてくれるそうです！！！」

嘘は少ししか吐いていない。うん。魔王が優しくて穏やかなのは事実だ。

「なるほど。お互い大変だな」

そういうと水城はコップの水を飲み干す。何とか危機を脱したようだ。

「にしても、柚羽ちゃん可愛いね。僕、一目惚れしちゃったよ。付き合ってください!」

レイがニコリと笑う。本気なのかどうかよく分からない顔だ。柚羽は目をぱちぱちと何度も瞬きさせ、チーズは怒りに声を震わせた。

「手前え! 姐さんに何言ってるんだコラァア!! 姐さんの隣は俺の席じゃー!!」

「いや、ちげーよ」

俺の冷静なツツコミがはいる。柚羽はほんの少しだけ眉をひそめる。珍しくおろおろとしている。不安そうな瞳で俺の方を見てきた。

「?」

何を求められているのかよく分からない。俺は心の中で首を傾げる。

「レイ。いい加減その癖直したらどうだ」

水城がレイの頭を叩いた。なかなかいい音がする。二人の仲のよさが伺えるやり取りだった。レイは愉快そうに笑った。

「美人を見るとついね。僕の中の遺伝子が騒ぐんだよ」

水城がため息をつく。どうやら、レイの口説きは日常茶飯事らしい。それを聞いた柚羽は、すぐにいつものポーカーフェイスを取り戻した。

「ついでに、お前の性別も教えておいたらどうだ？」

「性別？」

何をどう見ても男性だろ。

でも言われてみると中性的な感じがしてくる。髪は短いが女の子でも通る長さだ。言われてみれば、声も結構高い。ただ目つきというか、雰囲気にも男性らしさが滲んでいるというだけだ。でも、それこそ確固たる事実であろう。

レイは立ち上がり、お気楽そうな声で唱える。

「変身」

くるくる。バレリーナのように素早く、ターンするように回る。それが終わり、レイは俺の前で止まる。にこりと笑う目が俺を覗く。

「女!？」

目の前にいるレイは女の子だった。顔つきや背丈は変わっていない。しかし、目や唇の形、頬の肉のつき方、胸や体全体の丸みといったところが先ほどとは僅かに違う。いつの間にやら格好も先ほどの服と生地は同じだが、フリルのついたスカート、リボンのついた可愛い服に変わっている。

「マジック？」

「いいや」

声はそんなに変わってない。口調さえ変えれば、女の子でもいける。いけるっていうか、もうそのものだ。

「そういう種族。数が少ないんだ」

そういえば、こんな話を聞いたことがある。ナメクジには性別というものがないらしい。何でもゆつくりと動くので同じ種に出会う確立が少ない、そのため、どちらの性別も兼ね備えているらしい。

「美女を見ると男に、美男子を見ると女になるよ」

遺伝子が騒ぐとは、そういうことだったのか……。俺的もとい男的には、なんだか複雑な気分である。可愛い女の子だが、女の子ではない。これは、裏切られたといっても過言ではない。

レイはまたくると回って男に戻り、水城の隣に座った。ていうか、体の変化なら分かるが、服はいつたいどう変えているんだ。

「俺達の自己紹介はこんなもんだ。ところでお前達を召喚した人の名前をなんと言った？」

「えっと……」

俺は視線を泳がせる。おろおろしてしまい、自分が飲んでいたコーヒークップに手が当たり、こぼしてしまった。

「熱っっ！！！」

机の上で、つまみ代わりに出されていたナッツを食べていたチーズにかかってしまった。っていうか、ナッツ食いすぎだろ。つまみは皿大盛りに盛られていたはずだが、残りはほとんどない。

「あつ。ごめん」

「ったく、気をつけろよなあ」

ぶつぶつと文句を言いながらチーズは着ていた上着を脱いだ。

あ。

魔王の言葉が思い出される。

『でも小さい悪魔だから上着を脱ぐと羽が見えちゃう。だから気をつけてね。街の人がそれを見たらびつくりすると思うから』

から、という魔王の言葉が脳内でエコーがかかる。水城とレイはチーズの背中から生えている小さな悪魔の羽を見たまま固まっていた。周りの客はお喋りに夢中でこちらに気付いてはいないようだが、俺達が窮地にあることには変わらない。レイが驚いた顔で訊いてくる。

「もしかして、魔王の残党？」

言い訳はできない。こうなったら真実をありのままに話し、理解してもらうしかないだろう。

「まあ……。だけど、人助けって言うのは本当だ！ あいつは改

心して、仲直りしたいと思ってる!!」

「うん。知ってるよ」

「へ？」

その言葉を理解するのにはしばらく時間がかかった。

「魔王が改心したって言うのは、北の国の王様から聞いてる。僕らが探しているのは元部下だから」

俺とチーズは驚きで固まる。柚羽は胸をなでおろす。彼らは魔王が改心したことなぜだかを知っていた。レイが詳しく説明をしてくれた。

魔王が全世界に向けて戦争を仕掛ける前まで、北の王様と魔王は知り合いだったらしい。もちろん、戦争を仕掛けた魔王と国を守る立場にある北の王様は戦争の際に敵対した。結局その戦争は、魔王が負けたらしい。

そして、終戦してから五十年ほどたったとき、魔王が自ら、自分が改心したことを北の国の王様や大臣達にのみ伝えたのだ。しかし、戦争を起こし、虐殺、殺戮を繰り返した魔王の言葉を信じる者はいなかった。北の王様を除いては。

北の王様も魔王のことを心配しているそうだが、今の状況で魔王が改心したと言っても国民は信じない。なので王様は、まず魔王の命令を無視し悪さを働く魔王の元部下達を根絶し、魔王の社会復帰を支援するという計画を立てた。

ようするに、俺達と目的は同じ。

魔王のイメージアップである。

「チーズ、知ってたか？」

「いや。知らなかった。俺は戦争中に生まれたから魔王様と北の王が知り合いなことも知らなかった」

「魔王本人はこの計画を知らないよ。北の王様も、魔王が無駄に気遣いするのは避けたいから秘密にしてるし。第一、国民に王様が魔王の助けをしてるなんて知ったら、乱心したと思われるかもしれないでしょ。この計画は極秘だから」

なるほど。なので異世界から、わざわざ人員を寄こしたのか。水城も大変だ。などと俺が勝手に思っていると、水城は突然机を拳で叩いた。何事かと、周りの客の視線が集まる。水城は俺を指差した。

「そんな簡単にいくかああ!!!」

水城は激昂しているせいで、周りの客の驚く姿は全く見えていないようだ。

「表に出ろ！」

レイは怒り狂う水城の肩をポンポンと叩く。

「ちよつとちよつと。水城。落ち着いてよ。僕らの仕事は元部下の殲滅。現部下は関係ないよ」

いや、俺達、部下じゃないんだけど……。

「そんなわけにはいかない。こいつらが残党という可能性も十二分にある！」

なんだか、雲行きが怪しくなってきたな。

レイはため息をつく。

「つたく、水城はスイッチが入ると止まらないんだから」

水城の耳にレイの嘆きは聞こえていない。水城は俺をぎろりと睨む。鋭い視線が俺を射る。

「俺と戦え!!」

だから、何でこうなるの……。

勇者VS俺（後書き）

財布から一昨年のおみくじが出てきました

UUUです（・・・＊）

レイの服の変化は魔法でも何でもありません。ちょっと変わった構造ということにしています。変わった構造って何だよ、とかは言っちゃ駄目。そう思った人はめっちゃ早く生着替えしているとでも思ってください。それも駄目

感想やアドバイスをお待ちしています（。 - 人 - 。

お気軽にどうぞ（´・`・´）ノ

コンティニューしますか？

言われるがまま、流されるまま。というか、水城が勝手に俺に決闘？を申し込み、周りに偶然居合わせた客達が勝手に盛り上がり、勝手にカーターさんの店の前で戦うことを決めてしまった。道にはどこからかこの情報を聞きつけた野次馬が集結している。商売チャンスと、ホットドックを売る露店まで現れた。

ルールは簡単。俺が負けたら俺達の身柄は騎士団に預けられ、国の転覆を企むテロリストでないことが証明されるまで拘束。逆に俺が勝てば、俺達のことは捨て置いてくれるとのことだった。

なぜだ……。

本来止める立場にあるである水城の相棒、レイは『総夜が勝てば問題ないから。頑張つて』と俺に言ってくる。柚羽は感情に乏しい表情で『こんなところで、旅をやめるわけにはいけません。必ず勝って下さい』と言われる始末。無表情な分、言い知れない怖さというか凄みがあった。

「まあまあ。心配すんな。お前は这个世界じゃ、ランクAの騎士だから」

肩に乗っているチーズが言う。全ての元凶はお前だよつ、その言

葉を飲み込み、訊ねる。

「それってどれくらい強いんだよ？」

「ランクは世界規定があつて、一番下からD、C、B、A、S、SS。ランクAは中堅騎士程度だな」

「おつ。じゃあ、なかなかじゃん」

「ちなみに、柚羽はランクSだ」

「えつ。俺より上なの！？」

「美人だとランクが上がる」

「嘘付け！！」

確かに、柚羽は強い。もともと運動神経がいいし、頭も切れるし。けど男として、それは悲しいな。柚羽になんだか申し訳ない……。

何か、負けられないな。

良いところを見せたいというわけではないが、醜態をこれ以上さらすのはいかなものか。

「水城とかいう奴の勲章の量を見るに、ランクAと見た。あのエルフはランクSだな」

「へえ。レイの方が強いんだ」

なんだか意外な情報だった。あんなにへらへら笑ってるのに。しかも、まさかの両性類。いや、それは強さと関係ないか。

「エルフは特殊なんだよ。お前達が使えない防御魔法や治癒魔法も使えるからな。それに……。まあ、これはいいか」

「？」

何だよ、もったいぶらずに言えよ。そう言いかけると、水城が不機嫌そうな顔で尋ねてきた。

「おい、いつまで話を続けるんだ？」

「……………なあ、ほんとにやるのか？」

ランクAだろうと何だろうと、初心者には違いな俺が、一ヶ月もこの世界に身をおいていた奴になど勝てるわけがない。幼稚園児にガトリングガンを持たせても、世界制服はできない。知力、体力、気力が少なすぎるからだ。それと同じ。俺には戦いにおける能力は持っていない、戦術的な面は素人。

確実に負ける……。

「当然だ。行くぞ！」

掛け声と共に、水城は俺の懐目がけて飛んでくる。慌ててそれを前転で避ける。立ち上がりながら剣を抜き、水城の背後を取ろうとするが、やはり強い。水城は一瞬で俺の軌道を読み、背後から迫る剣を避ける。

「ネフシュタン!!」

水城の足元から青色の炎が湧く。本人は熱さを感じないようだが、二メートルほどしか離れていない俺は乾燥した空気と炎のひりひりとした香りを感じた。湧いてきた炎は、杖の形になった。目測一メートル五十くらいの青い炎の杖だ。水城はそれをバトンのように回

しながら俺にまた攻撃を仕掛けてくる。

「アクアグラフィエン！」

掌を水城に向ける。アクアグラフィエンは水属性の初等魔法である。炎は消せなくても、水城に当たれば一瞬だけでも目をくらませる。その隙に炎をかわそう。

しかし、俺の掌から発動された六角形の水の波動は、水城が杖を回すことで顔に当たることもなく、一瞬で蒸発した。

まずい！！

一気に間合いを詰められて懷を取られた。青い炎が俺の前に迫る。

「お前の負けだ！！」

ゆっくりと、スローモーションのように燃え盛る青い炎が俺の方に向かってくるのが見える。意識が遠のき、周りの喧騒が消える。先ほどまで聞こえていた、ホットドックを売る男の声も、鳥のさえずりも今は聞こえない。

周りのものが全て止まったと錯覚するほどだった。ギャラリーの方を見ると、柚羽とチーズが不安げな顔でこちらを見ているの分かる。

あ、勝たなきゃいけないんだった。負けたら柚羽達も捕まるんだ……。勝たなきゃ。

しかし、頭に靄^{もや}がかかったようで、上手く働かない。

とりあえず、今、俺の最重要課題は、三十センチ右にあるこの杖をどうにかしなくてはいけないということだ。

そう、思った。頭の中がクリアになる感覚が全身に電撃のように走る。途端に剣を握った左手が、跳ね馬のように動き出した。

「!!!!」

体をしゃがむように低くして杖をかわす。杖をかわしたら、すぐに体勢を戻して水城の腹に思いつきり蹴りを入れる。水城は顔を歪ませ、道に仰向けに転がった。その隙に、俺は水城の杖を持ったほうの腕を靴の底で踏んだ。

「つつつ!!!!」

「……………」

頭がぼおつとする。視界の明度が高すぎて、状況がよく飲み込めない。

感じるのは、感覚。理解できるのは、本能。やらなきゃ、やられる。

だったら、やられる前に、やる。

どこからか声が聞こえてくる。

「総夜。私達の勝ちです。早く離して上げて下さい!-!」

懇願するような、少し怖がっているような声音だ。女性の声。

あれ、誰だ。あの人。

っていうか、ここどこだ。あれ?

頭の靄が濃くなる。耳も遠くなり、世界中に自分と敵以外いない感じがしてくる。

俺はじつと男を見つめたまま動かなかった。声の女性がまた何か

言う。叫んでいるようだ。しかし、よく聞き取れない。辺りの騒音が静まる。水城はぎゅっと目をつむっている。

殺せ。誰かが言っている。誰だろうか？ いやそんなことはどうでも良い。殺したくないなら死ね。死にたくないなら殺せ。その二択しかここにはない。

俺は剣を握った右手を、振り上げた。

「氷結!!」

俺の右手が動かない。確認すると、右腕と剣が氷付けにされていた。俺はそれをぼおつと見ていた。頭の靄が少しずつ引いていく。世界が少しずつ戻ってくる。

「水城!!」

レイが一目散に水城の下に駆け寄ってくる。水城は額の汗をぬぐい、レイの手を借りて立ち上がった。続いて、柚羽が俺の元に飛んでくる。相変わらずの無表情だが、心のなしか少し目が潤んでいるようにも見える。

「解氷」

右腕の冷たい感覚がなくなる。解氷とはオーガのときのようになんかのものを破壊するものではなく、ホワイトアウトの魔術を解くものである。右腕が自由になった俺は、剣を鞘に戻した。そして、今起きたことについて考えた。

俺、今何しようとした？

頭に靄がかかっていた感覚はもう消えた。今はしっかりしているが、先ほどの感覚は異常だった。体が自分のもののように感じられなかった。誰かにのっとられたような気分だ。

いや、そうじゃない。

俺の中ではその確信があった。たぶん、アレは本能だ。人間が窮地に陥ったときの反射だ。やったこともない戦闘。死への恐怖。生への渴望。そして、俺はそれに従い、水城を……。

本気で殺そうとしていたのだ。

「……………総夜。もう平気ですか？」

「うん」

柚羽の黒目が大きい綺麗な目が俺をのぞく。不安がそこから伝わった。当たり前だ。俺はさっき、人を殺しかけたのだ。そばにいい気がするわけない。周りの観衆も俺の方を見て、なにやらヒソヒソと話している。柚羽はそれに気がついた。

「とりあえず、部屋に戻りましょう」

「大丈夫。ちょっと歩いてくるから」

「ですが」

「

このまま誰かといられる状態ではなかった。精神が疲労して、今にも倒れそうだ。そして何より、自分に嫌悪感と恐怖を覚えた。しかし、俺は柚羽の不安を取り除くため、笑顔を作って見せた。柚羽はまだ何か言いたそうにしていたが、黙った。

「こいつ、頼む」

チーズの首の辺りの皮を掴み、柚羽に渡す。チーズも柚羽と同じ

ような顔で俺を見てくる。

「すぐに戻るから」

笑いながら手を振る。俺を見て囁きあう観衆は俺が通ろうとする
と、波が引くように道を開けた。それを無視して通り過ぎ、俺はゆ
っくりと歩きながら街の小道に逃げた。

しばらく歩くと、橋があった。石造りの立派な橋だ。橋の横幅は
広く、俺のいるところから少し先でピエロが玉乗りをしている。青
い空には鳥が群れを成して飛んでいる。耳を澄ませば、水が岩に当
たる音が聞こえてくる。平和という文字が浮かぶ。

そう、今まで俺はこういうところで生きてきたのだ。

命の危険など感じない。天然記念物の卵のように、大切に
育てられてきたのだ。しかし、今は違う。ここは、俺がいた世界と
は違う。魔王がいて、悪魔がいて、勇者がいる。

俺の腰に刺さった剣は、襲い掛かるモンスターを斬り、冒険を進
めるための道具なんかじゃない。

ゲームの主演みたい？ ふざけんな。

オーガを斬ったときのことを思い出す。あの時、確かに俺は興奮
し歓喜していた。

なめてた……。完全に。

剣は命を奪うためにある。俺は今、それを持っている。

これから、武器を持った盗賊に出くわしたらどうする？ 命の危険が起きたとき、俺はその盗賊をどうするだろうか。中堅騎士の力を持ち、刀を腰に差した俺はどうする？

命を奪う。

その意味を、俺は知った。

コンティニューしますか？（後書き）

メロンパンのあの少し焦げた端の部分だけ下さい

U Z U です（・・・*）

以下は、どうでもいいことです。長くてすみません。

ゲーム下手なので、コンティニューによく出会います。出現率超高いです。ポケモンの草むらで一步進むごとにポツポ出てくるみたいな感じです。「もういいよ」。しつこいよ」といってもポツポは出てきます。別に嫌いじゃないですけどね、ポツポ。要するに、一つ戦うことに負けるんですね。そのくせ、すぐにゲームに手を出してしまう。P S 3 だなんていうボタンが4つあって、十字ボタンとくるくるがついた奴を買ってしまう。「できんじゃない？」的な感じで始めたF F 1 3、未クリア。「もうすぐ2が出るぞ。どうするんだ、お前未クリアじゃないか！」とライト姐さんから言われそうです。ごめんなさい、ライト姐さん。バルトアンデルスは必ずや今年中に倒してみせます。

感想やアドバイス（小説の）をお待ちしています（。・人・。）
お気軽にどうぞ（・・・）ノ

命の約束

橋の柵に肘を突いていたら、もう夕方になっていた。この橋は街の中心にある。そこから見える街の景色は綺麗だった。いつだったか本や雑誌で見たヨーロッパの街並みそっくりだ。時計台が鳴り、音が響く。小路を子供達が駆け回り、道端では花を売っている。とことどころヨーロッパと違うのは、飼いならされたペガサスやら、大型犬くらいの大きさの鳥が飛んでいたり、大名行列みたいに可愛い妖精が行進しているくらいである。

ぶっちゃけた話。俺は自信をなくした。いや、元から自信なんてほとんどなかったんだけど。ともかく自分がこの世界で天狗になっていることは痛感した。特に何の問題もなく、この世界でやっていけると考えていた。腰にさした剣が異様に重たく感じた。

俺には、その重みを背負えない。

今になってみれば、オーガと戦ったときもおそらく精神が麻痺していたに過ぎなかったのだ。もう一度戦うことになっても、俺は前のように何も考えず戦うことはできないだろう。

とりあえず、兎の一匹も殺せなかった俺と柚羽はこの世界に来てからオーガ四頭（一頭は死んだわけじゃないけど）をとりあえず処断した。

ブラック・ボックスの力は正直とても怖かった。命というものが自分の手のひらに、あるということをヒリヒリと感じた。そしてそれを、卵の殻を割るような手軽さで潰すことができるのだ。

ここはゲームの世界でも、ヴァーチャルリアリティでも何でもないというのに。しかし、俺は確かにあの時、楽しいと思った。ゲームのプレイヤーになったようだと、歓喜した。命というものが見えなくなっていた。

このままだと、いつか人も殺す。

それが怖い。どうしようもなく、怖い。足が震え、頭痛が襲う。盗賊に襲われたりして、やむ終えずそうすることがあるかもしれない。正当防衛だろうと何だろうと人殺しは人殺しである。自分の命のために他人の命を奪う。そういう世界に今、俺達はいるのだ。

死にたくはない。しかし、殺すこともできない。

こんな生半可な気持ちで、参加するんじゃない……。

「総夜」

隣を見ると柚羽がいた。夕焼けの橙が彼女の白い肌を塗り替える。栗色の髪が風にゆれ、黒い瞳が俺を捉えた。静かな鶴のように気高く、雪の降り積もった森の木々のようにしなやかで、綺麗な目だった。

別に驚きはしなかった。すぐに帰ると言っておきながらも、帰っ

てこない俺を捜しているかもしれないと、何となく考えていたからだ。そう思いながら俺は帰らなかった。帰ることができなかった。

「俺達は旅を続けて、どれだけの人を殺すんだろうな」

訊ねるといふより独白するような感じで、俺は意味もない言葉を吐いた。柚羽の肩に乗っているチーズが、橋の柵の上に飛び乗った。俺の肘の近くに、背中を向けて座る。

「殺すかどうかを迷ってたら、死んじまうよ」

チーズが言った。はつきりとした物言いだった。夕焼けを見ながら種を頬張っている。その背中はいっになくどっしりとしていた。

「人を殺さず、生きていくなんてできやしないさ。まして俺達は魔王の手下。本来見方である、善良な市民からも敵視さてる。それが嫌なら、悪いことは言わねえ。元の世界に帰れ」

「……………」

魔王の目が思い出される。男に二言はないだとか言う、俺の建前は、どうなったって構わない。しかし、魔王の孤独はどうすればいい。洞窟に押し込まれ、各国から嫌われ、それでもなお、人を思うあいつを、俺はどうしてもほっておけない。帰るわけには、いかない。だとすれば、道は一つしかない。

人を殺す覚悟。人の命を奪い、自分の命の糧とする。俺に今必要なのは、その覚悟なのかもしれない。

しかし、柚羽はそうは思っていなかった。

「でも、だからこそ人は殺せません！」

めずらしく、柚羽が熱くなっていた。きっと彼女も、オーガを倒した後、俺と同じように悩んだのだろう。今、自分に必要なもの。今、自分に欠けているものについて。命というものについて。

いつも冷静沈着な彼女は、めずらしく両手を握り締めて大きな声を出していた。

「私達は平和を望む魔王さんの手下です！　だったら、私達は殺生をするべきではありません。殺さずとも、生きる道を探さなくてはなりません！！」

誰も殺さないし、自分も死なない。それが生きる道。

その姿は、氣高かった。それでいて、強かった。俺とチーズは氣^お圧された。

「柚羽……」「姐さん……」

決意するように、宣誓するように、夕日に向かって柚羽は言った。その姿は凜々しかった。清廉で、何者にも侵せない強い魂と生命力が溢れていた。

俺達に欠けているもの。それは覚悟だった。

どこの国だろうと、どこの世界だろうと。魔法があろうとなかろうと。

自分の道を信じて歩む。

その覚悟だった。

「うん。頑張ろう」

俺達の誓いは、甘っちょろいかもしれない。大人が聞けば、子どもの綺麗事と言われるだろう。でも、それでも、俺達はこの道を選びたい。殺生をせずにやっていけるほどこの世界が易しくないことは、知っている。しかし、失いながら生きていくのではなく、拾いながら生きていたい。

「まったく、姐さんも総夜もどーかしてるっ」

ほっぺをもぐもぐさせながらチーズが言った。チーズは立ち上がり、俺と柚羽の方を向く。

「でも、それでこそ魔王様の手下だ」

柚羽の口角がほんの少し上がる。俺は声を出して笑った。

影が三つ、長く伸びる。

命の約束（後書き）

小さいとき、地球が回ると知りました。しかし、自分は右から左に回るのではなく、上から下に回るのだと思っていました。一日で北極と南極が入れ替わるわけです。「なんで寒くならないのだろう」と幼少時代にマジで考えていました。

UZUです（・・＊）

感想やアドバイスをお待ちしています（。人。）
お気軽にどうぞ（、、）ノ

アメイジングゲロリポップ

「つーわけで。悪かったな」

「別に。それに俺が吹っかけた喧嘩だ。悪かった」

夜。俺達は水城の部屋に行った。水城達もカーターさんの宿に宿泊しているとセドリックから聞いたので部屋番号を教えてもらったのだ。

ベットが二つと、深緑のソファが置かれている。俺は水城と向かい合うように座り、隣は柚羽が座っている。水城の腕には痛々しい包帯が巻かれていた。水城は俺の視線に気付いたのか、氣遣ってタンクトップの上から黒い上着を着てそれを隠した。

「気にしないでいい、すぐに治る」

「……………そうか」

暗くなった雰囲気を感じ飛ばすように、レイが何か思いついたのか、パンっと手を叩いた。

「あ、じゃあさ。お礼といつては何だけど、ちょっと手伝ってくれない？」

「何をだよ？」

「最近街で、薬が流行ってるんだよ」

「薬って、もしかして」

「そ、非合法薬物だよ。隠語で、アメイジンググロリポップなんて言われてるらしい」

「その売買に元部下が噛んでいる。つっても、下っ端の下っ端だけだな」

薬物か。何かリアルな話だな。いや、リアルなだけどさ。

柚羽に目線で確認を取ると頷いた。街での喧嘩の仲裁もそうだが、彼女は正義感が強いらしい。真面目な性格だ。俺も水城にあんな酷いことをしたわけだし、飲まないわけにはいかない。一様、勧善懲悪なわけだし、イメージアップにも繋がるだろう。

「じゃ、決定！ 早速だけど、まどろっこしいことは避けて、殴

りこみに行こうか？」

「いやっ！ 早速過ぎるだろうっ」

いいんですかそれで。みんなで調査したり、ボケたり喧嘩したりするとかは無いですか。しかも殴り込みにかよ。もったいい言葉を使おう。勇者だろ、一様。

「だってもうアジトも割れてるしー。もう、水城が喧嘩なんでするから昼に行けなかったんだよ」

「いいだろ、終わったことは。で、どうする？ 俺達としては人数が多いほうが楽だから来て欲しいが」

「……………うん。まあいいか。シュールにクールにいこう。俺は別に大丈夫」

「じゃ、殺し屋っぽいのが何人かいるかもしれないけど、殺しちや駄目だよ。殺生は王様から禁じられてるから。じゃ、レッツゴー」

おiiiiiiiiiiii！ さりげに重要なこと言ってたぞ！

殺し屋？ 聞いてないっ。ちょっと、ちょっと。まだこっちに来

「レナードさん！！　起きてくださいよ、ほら」

「……あと五分」

「まったく、貴方という人は……」

城の一室。そこには大きな事務用の机と高級そうな応接セットが置かれている。隊長と呼ばれた男は、事務用の机に突っ伏して寝ている。もう一人の男はため息をついた。

黒い髪に、銀の糸で織られたローブ。彼は北の国フルロフィアの副將軍を務めていた。物腰の穏やかそうな口調と、誰に対しても温厚で頭も切れる。その上、美形ときた。彼はもともと大した家柄の出身ではなかったが、その若さにしてここまで上り詰めた、エリートである。

一方、こちらで突っ伏してオネンネしているのが、フルロフィアの將軍。茶色い髪を一つに束ね、安っぽいローブを着ている。もちろんそのローブには、將軍らしくたくさんのお勲章やらがついていた。こちらはそれなりの貴族の出身。しかし如何せん、腕は確かだがリーダー面はからっきし。慕われて人望も厚いが、それだけでは組織は動かない。この安いローブだって、どうせすぐ汚す、という理由で着ている。人の目やら、社会の地位とか、そういうのは気にしない、破天荒な人なのだ。

その破天荒男の尻拭い役は、慣れた手つきで脅しにかかる。

「わかりました。では、こうしましょう」

男は大きく息を吸い込む。

「レナード將軍は昨日会議をサボり、コナー中將と合コンのセツ
テング」

「起きたあああ！！！！　めっちゃ起きた。うん。いい朝だな、
ヴィンス」

「もう昼です」

ヴィンスはしれつとした顔でそういうと、手に持っていた山積み
の書類を机に載せる。元から机の上に載っていた書類もすでに山積
み。書類が積み上げられすぎて、もう壁のようになってる。

「え、何これ？」

「何これ？ じゃないですよ。仕事ですよ、仕事」

「俺、デスク仕事は嫌いなんだよ」

「何言ってるんですか。こんなのは氷山の一角ですよ。これはどうしてもレナードさんに、って来た書類です。他の書類は全部僕が見てます」

そういわれると、言い返せない。ヴィンスはデスク仕事がとてつもなく速い。騎士とは思えぬ速さだ。もちろん、腕も立つ。ようするに完璧なのだ。非の打ち所がない。

「もう、お前が將軍でいいんじゃない？ いや、それが良いに決まってるよ。みんな腹の中じゃそう思ってるんだよ。俺なんて、いい方が良くに決まってる」

將軍は軽く鬱モードに突入した。

「また、そんなことを言い出す……。いいですか、僕は貴方を尊敬してここにいますよ。そんなこともう言わないで下さい。じゃ、僕は新米達に稽古つけにいかなきゃいけないんで」

腕時計で時間を確認して、てきばきとヴィンスはその部屋を去ろうとした。目を潤ませ、子どものようにすねるレナードはまだ文句を言っている。

「ヴィンスのあほ！ 人でなし！ 女たらしー！」

その咆哮は城中に響き渡る。それは恒例行事のようなもので、女中も料理人もみんなそれを聞くと笑っていた。彼が好かれるのはこういった子どももみたいな性格なこともあるかもしれない。城中からくすくすと笑い声が聞こえてくる。王様も、兵士も、護衛の者もこのときばかりは気が緩んで笑ってしまう。

彼はそんなムードメーカーだった。優しく、おおらかで、寛大で、子どももみたいで、理不尽で、適当。そして何より愛されていた。だから、その当時は誰も想像していなかった。

五年後に彼が、魔王になるということを。

敵味方、少なくとも三千万人の命を奪ったとされる戦争を引き起こした張本人。殺戮、虐殺を繰り返してなお、止まらなかった、本物の魔王。

レナード・ベッグホードはごくごく普通とはいいがたいが、人間だった。

人を愛し、人を思う。人間であつた。

アメイジンググロリポップ（後書き）

24がテレビでやるらしいですね

UZUです（・・・*）

まあ、話はよく知らないんですけどね。女性関係が結構どろどろしてるとは聞きましたが。でも洋画とか好きなので、楽しみにしていたり……

感想やアドバイスをお待ちしています（。 - 人 - ）。
お気軽にどうぞ（・・・）ノ

元部下

レイが向かったのは、明らかに怖そうな人がいる通りだった。薄暗い路地裏。壁には落書きに、煙草の吸殻や生ごみが目立つ。ホームレスらしき男や、性別も判断できないほどのガリガリにやせ細った大人が道の端に捨てられたように落ちていた。

「おいおい。大丈夫なわけ？」

小声で尋ねる。先に行く水城が前を向いたまま答える。

「あまりジロジロと見ないほうがいい。襲われるかもしれない」

慌てて視線を前に戻す。超怖いんだけど。ときどきと心臓の音が聞こえてきそうだ。ランクAとはいえど、チキンな性格はここでも変わらないらしい。

柚羽が水城の耳元で囁く。

「水城さん。彼らの爪、おかしくないですか？」

俺も、チラリと道端にいる人の手元を見る。爪事態に変化はないが、爪の下の皮膚が、紫色に変色していた。

「あ、ああ。そ、それは薬の、ふ、副作用だ。こ、この辺の奴らは、だ、いたい服用してい、いるから」

妙におどおどとした返答の仕方だった。しかも顔が赤い。泣く子も黙る天然少女はこういうことには気付かないので、何事もなかったかのように頷くだけだった。レイも素知らぬ顔をしている。俺と肩にいるチーズは首をかしげる。

「どういうことだよ、あれは？」

「どうって……惚れてる、とか？」

「惚れてるって、誰に？」

「誰につて……柚羽、じゃない？」

「……………」

「……………」

嘘おおおおお！！！！！！！！

ここに来て恋フラグ！？ マジか！ これから殺し屋っぽい人殴りにいくところにこれか！？

「おいおい。 姐さんは俺に惚れてるっていう設定なのに何しやる、あいつ」

「ねーよ、そんな設定。 お前の設定は食品だ。 もしもの非常食だ」

にしても、意外や意外な急展開。 急転直下のどんでん返し。 悪魔と勇者のまさかの三角関係。 柚羽は気付いていないようだが、本心は分からない。

案外上手くいったりして。 二人とも正義感が強く、真面目なところは似ている。 水城は少々生真面目というか、熱血過ぎるが、男としては好感が持てる。 もちろん、俺としては大賛成である。 まあ、

あの天然娘がこのままではそれに気付くことはないと思うが。

「ここだよ」

レイが指差す場所は、古びたバーの入り口だった。路地の袋小路になっていてところに、突如現れる黒い扉。そこにはクローズの文字が書いてある。不思議なことにこの辺りには、ホームレスらしき人達の姿がなかった。それもそうである、これから薬物を売るのに、その薬物を服用したが故の悲惨な末路を見せては、お客がウタインしてしまう。

「で、どうするのさ？」

レイに尋ねる。一様作戦らしきものはあるらしい。

今回の事件で薬物の売り子は六人。そのうち、四人はただのブローカーで恐らく戦闘能力は低い。問題は残り二人。

「たぶん、プロの殺し屋だね」

「だね　じゃねーよ!!」

小声で思わず、シャウトしてしまった。殺し屋つて、あれですよ。ゴルゴとか、キル・ビルとか勾宮とかですよ。って、勾宮は作者の趣味なだけだろ。そういうのを作品に入れるんじゃない!

「まあまあ。回りくどいのは苦手だから、開けるよ。準備OK?」

俺は剣を抜き、水城も青い炎の杖を出す。柚羽も準備は大丈夫みたいだ。レイは真剣な表情で、一気に扉を開く。中はビリヤード台が一つと、ダーツ板がある。カウンターの奥には安そうな酒が並んでいる。

男は六人。灰色や黒色の薄汚い服を着ている。カウンターに座って酒を飲んだり、ビリヤードで遊んでいたようだ。俺達に気付いた男達は慌てた様子で剣や拳銃を取り出す。

「だ、誰だお前ら!!」

「勇者だ」「魔王の手下です」「エルフです」「高校生です。あ、今は剣士です」「チーズだ」

「いや、バラバラで何言ってるのかわかんねーよ!!!」

律儀に突っ込んでくれたきつと心優しい男は、ホワイトアウトによつて、足元を氷付けにされてしまった。柚羽、容赦ない。

一方、水城は利き腕を怪我しているとは思えない、素晴らしい手さばきだった。素人の男三人の腹に突きをお見舞いしている。

ダーツ板の置かれた辺りでは、レイが殺し屋らしき人物と対決している。プロなだけあって男の動きが早い。しかし、レイだって負けてはいない。エルフは防御魔法や治癒魔法などができる代わりに直接攻撃魔法は使えない。だが、運動神経は人間のスペックを遥かに超える。天井や、壁を足場にした立体的で、ワイヤーアクションのような体勢からの攻撃ができるのだ。さすがにこれには殺し屋も対応しきれない。

「坊主。よそ見していると死ぬぜえ」

「!!!」

後方から襲ってきた弾丸を、慌てて避ける。カウンターの下へ体を転がせて、何とかやり過ごした。どうやら二人目の殺し屋らしい。

「隠れちゃ駄目だよ。カッコよく登場したんだから、最後までカッコよくしててよー」

男が下品に笑う声が聞こえてくる。確かに、ずっとここに隠れているわけにもいかない。男が、俺のいるカウンターを覗き込む。

「ああああつつつ！！！！」

俺は思いつき男の目に酒の瓶を投げつけた。男が痛みに声を漏らす。その隙に立ち上がり、男を酒瓶が並んだ棚の方へ蹴り飛ばした。たくさんのガラスが割れる派手な音がする。男は額を切ったが、なんとかそこから立ち上がった。頭には怒筋が浮かんでいる。どうやら、本気モードになったらしい。

おいおい。あれでもまだ立ち上がるのかよ……。

殺し屋はゆらゆらと歩きながらだが、俺をしつかりと見据えて、銃口を向ける。逃げなければと思うが、足が動かない。銃の先端は俺の瞳を吸い込む。引き金に指がかかる、やがて弾丸は俺の肉に食い込み、内臓に穴を開けるだろう。イメージしただけで背中を汗がっつたる。

どうやら俺はランクAの戦闘能力とランクSのチキン能力をもっているらしい。って、言ってる場合じゃないっつ。

「これは貸しだぞ、総夜!!」

青い炎が視界に入る。水城は杖を三百六十度に回転させながら、俺の前へ飛来した。手先で弾丸を打ち落とす。そして、間髪いれずに男のみぞおちを突いた。男は今度こそ、床に倒れた。

「わかった。今度チロルチョコ奢るよ、遊」

俺は口元を吊り上げる。遊は『いらん』と突っ返した。レイと柚羽も戦闘が終わったらしい。何とか、生け捕りで六人を捕まえることができたようだ。俺達は顔を見合わせ、安堵のため息をついた。

後はこいつらを縛って自衛団に引き渡せば良い。自衛団とは田舎用の騎士団のことをさす。都会にある騎士団は警察のように犯罪者の取り締まりをしているそうだが、自衛団はきちんとした教育を受けていた者は少なく、主にその村の若い衆が集まった組織で構成されている。そのため活動内容は、殺人や強盗などが起きたとき、騎士団に応援を頼んだり、被害拡大を防ぐために働いたりするくらいだ。ちよっと違うが日本で言う消防団に似ているかもしれない。

とりあえず、この街には騎士団が設置されていないので、自衛団にこいつらを受け渡し、騎士団に渡してもらおう。

「おやおや。潰してしまったのですか？」

「？」

奥の部屋から子どもが出てきた。歳は12くらいだろうか、緩くウェーブのかかった黒い髪をしている。知的で穏やかそうな表情をしていて、堂々とした雰囲気もある。少年は、ビリヤード台の上に座り、足を組む。顔には張り付いたような薄気味悪い笑顔がくっついていた。

「誰だ？ 仲間か？」

子どもといえど、油断はできない。この場所にいる時点で、彼がただの子どもじゃないことは明白である。俺の問いに少年はゆっくりと答えた。

「ヴィンス・イブリース。それが僕の名前です」

遊とレイの顔色が変わった。場の空気が張り詰めたものへと変わっていく。遊はヴィンスと名乗る少年を睨みつける。

「魔王の片腕。元部下の筆頭だな？」

「元部下？ 笑わせないでくださいよ、いつのお話ですか？ 百年も前の話、蒸し返さないでくださいよ」

「黙れ。この薬物の事件に貴様が絡んでいることは分かっている」

「そうですか。それは困りましたね」

ヴィンスはわざとらしい困った顔をしてみせる。考えるように口元に手を当てる。

「では、口が利けないようにするだけです」

ニコリと笑い、ビリヤードに使う杖を手取る。危険を感じ、すぐに臨戦体勢に入ったが、もう間合いを詰められていた。ヴィンスが持った杖が俺の心臓の辺りを狙ってくる。衝撃も動揺もなく、思考する暇も与えない手さばきで。

あれ？ 嘘……………。

皮膚に何かが抉り込む感覚がする。そこで、俺の意識が途絶えた。

元部下（後書き）

こめかみって何で米神って書くんだろうか……
UZUです（・-・*）

感想やアドバイスをお待ちしています（-人-。
お気軽にどうぞ（・-・）ノ

父親

「おいおい。大丈夫か、総夜！」

「……………うん。平気だけど」

道路だった。見覚えのある通学路だ。俺は自転車から転げ落ちて、歩行者道路に横たわっていた。隣にいるのは同じ部活の東あづまだった。俺は、体と自転車を起こして、また漕ぎ始めた。頭がギンギンする。トンカチで叩かれてるみたいだ。

「な、なあ、東。俺、さっき何してた？」

「何って？ 俺は今さっきここを通ったところだから知らないけど」

「何か、変な男に襲われた気が……………」

「変な男！？ お前、こけた時に頭を打ったんじゃないか？」

「あー。そうかも」

少しずつ痛みが引いてく。確か、学校から帰る途中で目の前が真っ暗になって……。

あれ？ それから、俺、どうしたんだっけ？

思い出そうと頭をひねると、頭痛がぶり返す。やはり頭を打っていたらしい。明日にでも病院に行った方が良いのかもしれない。

「あ、総夜。今日晩飯食ってくか？」

「いや、今日は平気。カレーつくっておいたから」

「ならいいけど、遠慮するなよ。まあ、暇になっったら来いや」

「ああ。じゃーなー」

そういつて東と別れる。俺と東は小学生のころからの付き合いだった。家も近いし、高校も同じだ。だから東は俺の家庭環境も知っている。

母親と俺は俺がまだ幼稚園児のころに死別し、父と祖父との三人暮らしとなった。しかし、父が体調を崩し入院して、実質俺はじいちゃんに育てられた。そしてじいちゃんも一年前に天に召され、俺は一人暮らしとなった。

金銭的な面では何も問題はなかった。保険も遺産も、親戚からの助けもいらなくらいたつぷりと。さすがに、一生働かなくても生きてける程はないが、俺が就職するまでは十分足りる量だった。なので、親戚の引取りを拒否して今でも住んでいた一軒家に居続いている。

東家はそのことを知っており、度々夕食を振舞ってくれる。優しい人達だ。しかし、正直奥さんよりも俺のほうが料理の腕は良いと思う。それに、何度もお邪魔するのも気が引けるので、今日は辞退した。

自転車を庭先のガレージに入れて、鍵を開ける。玄関には見慣れた靴が一足、乱雑に置かれている。俺はため息をつきながら靴を脱ぎ、リビングへ向かう。

「やつほ。お元気ですか？」

「不法侵入ですよ。坂田さん」

広いリビングには、モノクロの家具が少しあるだけ。母は物がごちやごちやするのを嫌う人だったので、シンプルなものしか置かれていない。中でもソファはこだわり抜いた一品で、ヨーロッパのオーダーメイドらしい。坂田さんは発泡酒を片手にその二人がけのソファに王様気取りで座っていた。僕は真正面の椅子に腰掛ける。

「つていうか、何しに来たんですか？」

綺麗にセットされた髪に、黒縁の眼鏡。年は確か今年で三十だ。見た目だけは優秀そうだが、中身は腹黒い悪徳刑事である。

父は警察庁に務めていた。といっても、どこぞの湾岸署みたいな、熱血刑事ではない。キャリア組み。わかりやすくいうなら、室井さんのポジション。まあ、管理官だったかどうか知らないが。そして坂田さんも同じくキャリア組み。現場で遺体も見ることなければ、刑事のくせに捜査の仕方也不知道という。いやはや、世の中は腐っている。

実は、父のいた役職は何かと厳しい場所らしい。上からの圧力をもろに受け、マスコミの抑圧も行う。バランスを保ちつつも、下も上も立てる。ストレスやら、他のキャリア達の罨やりに引っかけたりして、半年ほどのローテーションでころころとその役職の人間が変わっているらしい。父はそこに五年居座り、手腕を振るい続けてきたが、父が去り十二年たった今でも、後釜は見つかっていないらしい。坂田さんは、その役職の直属の部下。本来ならば坂田さんが父のあとを継ぐべきなのだが、昇進するには暗黙のルールをクリアしてない。もう少し、点数を稼ぐ必要があるのだそう。点数って、営業マンじゃあるまいし。そういうと坂田さんは、似たようなものだよ、と笑った。

自分は上に上がれない。しかし、上は自分より力量が低い。その愚痴をなぜか全然関係ない俺の所へやりに、わざわざ俺の家まで来

るのだ。嫌がらせだ。

「つれないねー。総夜君は。こっちら大変なんだよ。ほんとに」

「ご愁傷様です」

話が長くなりそうなので、俺は夕飯を作ることにした。カレーというのは嘘だ。迷惑をかけたくなかったので嘘をついたのだ。とりあえず、トーストを作る。リビングとダイニングは繋がっているの
で、そのまま話は続けられる。坂田さんは、ぐびぐびと持参してきた発泡酒を飲む。

「山下さんはカリスマだったからねー。ほんとに。君のお父さんはすごいお人だ」

「家庭より仕事を選んだ人を尊敬するには俺にはもう少し時間が要りそうです」

父は無口な人だった。職場に行ってもそれは変わらなかったと聞く。冷たい仮面が、剥がれ落ちる瞬間を俺は見たことがなかった。母はそれを嫌い、喧嘩が耐えなかった。父のことを好きかといわれれば、即答でノーだ。人形を愛することはできない。しかし、嫌い

かと言われても、困る。人形は嫌いになれない。意思も思想もないからだ。それと同じ。父が何を思い何を想像しているのか、俺にはさっぱりわからない。今も昔も。

ただ、母が死んでからの十二年。ひとつ分かったのは父は母を愛していたということだった。

母が死んですぐに、今までの自分の行いを悔いたのか、父は精神を病み、入院した。俺にはそれが意外だった。父は天地がひっくり返っても、そんな人間らしいところを感じさせる人ではなかったのだ。もちろん、母を傷つけた父に憤りを感じたこともあったが、病院のベッドの上で何もせず天井を眺める父を十二年間見続ける内に、どうでもよくなってしまうた。本人は今もまだ呪縛と戦っている。

今の父は、ただの抜け殻だ。職場復帰など、望めるわけもない。

「ま、代理もいるけど、あれは駄目だわ。いまだき高学歴だけじゃ、経営はできないんだよ。俺だったら、まず公安の武田をだな……」

坂田さんはまだ演説を続けている。僕はトースターの前で無意識に母のことを思い出していた。

父親（後書き）

水族館に行くとイルカに後をつけられます
UZUです（・-・*）

感想やアドバイスをお待ちしています（-人-。
お気軽にどうぞ（・、・）ノ

黒いローブデコルテ

今でもよく覚えている。母と父は仲が悪かった。というより、母が勝手にそう思っていた。父は無口な人だった。会話のキャッチボールが下手というよりは、それ自体を放棄している。いつも冷たい目をしていて、何をしても笑わない、ロボットのような人だった。

仕事はしつかりとしている。ギャンブルや酒にはまったりということもない。そういった社交的でないところを除けば、ルックスもステータスも完璧な人だった。きっと母もクールで二枚目、それでいて金持ちというところに惹かれたのだと思う。

しかし、夫はクールというより、無感情だった。何を言っても『うん』としか言わない。しかし、恋は盲目というが、母は付き合っているころは恐らくその点は気にならなかったのだろう。というのも、母は明るく良い意味で嵐のような人だったからだ。相手の反応なんてお構い無しに、喋っていたに違いない。

だが、結婚してからの父の無口はこたえた。夕飯や家事、最近話題のニュース。どれをしても父は愛想笑いの一つもしない。そんな父に、母は嫌悪を抱くようになったいた。

「ねえ！ 聞いているの！！」

「聞いてるよ。続けて」

夕飯のカレーを口に運びながら、父が母の目を見ずに言う。父の隣にいた俺はすぐに身を縮めるようにして丸くなった。反射神経のようなものだった。この地獄の中で僕が生き残れるスペースはこの小さな膝のなかにしかない。

「嘘。聞いてなんかないでしょ！ 私の話なんて」

母が手に持っていた皿を床に叩き付けた。怖くなくてもっともつときつく膝を抱え込む。心の中で『神様、助けて』と何度も何度も繰り返す。父はスプーンを机に置き、ようやく母のほうに向き直る。

「仕事から帰って疲れてるんだ。静かにしてくれないか」

父の声に、相変わらず感情はなかった。淡々とさばさばとした物言いに母の怒りはますます加速した。

「私の話なんてどうだっていいんでしょ！！ 私がこんなに身を費やして家族のために働いているのに、貴方はいつもそう。総夜！！」

突然、母が僕の名前を呼ぶ。びくつと体が震える。

これは劇だ。劇なんだ。俺は母の言うとおりの台詞を言えば良い。そうすれば、ぶたれたり、歯を抜かれたりしない。もしも失敗すれば、もっと恐ろしいことが待っている。

「お母さんは、貴方のためにしっかりと働いているわよね？」

「はい……」

「貴方は、お母さんを愛しているわよね？」

「はい……」

母は顔を真っ赤にして父のほうを向き、怒鳴る。

「総夜は私を愛してくれてる！なのに貴方は、私を愛してくれない！！」

母はそついうと肩で息をした。怒りで額に汗が浮かんでいる。その姿は悪魔だと思った。母に悪魔が憑依した。いつも優しい母が、父の前では悪魔になってしまふ。僕はその時間が、とても怖かった。しかし、それでも父の心は微塵も変わらなかった。

「美夜子、近所迷惑になる。静かにしてくれ。君がそんなにも僕のことを嫌いならば、出て行けば良い。総夜の親権も譲るし、慰謝料もきちんと払う。それなら文句はないだろう？」

父は真面目な表情を一切崩すことはなかった。

お前は必要ない。

そついう、否定だった。父の言葉に嘘がない分、母の心は痛めつけられた。父はいつも事実しか言わない、主観が入ることはない。母は泣きながら、自室に逃げる。そんな茶番を我が家は何度となく繰り返していた。

そして、あるときだった。僕が幼稚園児だったとき、事態は変わった。

母が僕の手を握って、家を飛び出した。幼稚園に行く少し前の時

間だった。父は会社に行っている時間だ。母は荷物も持たず、駅まで車を飛ばした。目は充血して、顔はやつれていた。髪の毛のキューティクルはぼろぼろで、皺が目立った。

母は黒い服を着ていた。カラスのように真つ黒のパーティドレスだ。シンプルなつくりになっていて、母はそれを気に入っていた。まだ、二人の仲が悪くなかったとき、よく話してくれたので覚えている。母はこのドレスを着たパーティで父に出会ったのだそう。一目惚れで、猛アタックしたらしい。そんな思い出のドレスを母は着ていた。

嫌な予感しか、しなかった。心の中がかき乱れて、不安の穴に落ちていくような感じだ。怖い。自分の知っている母ではない。自分はいくらからどうなるのか、わからない。もうどうしようもないくらいの不穏さ。喉から漏れ出しそうなほどに溢れた涙を飲み込む。

着いたのは、駅だった。実家に帰るのだろうか、と思い、少し安心した。母は、僕をチャイルドシートから降ろして、そのまま抱きかかえる。母はとり憑かれたように駅の中へ入っていった。改札機の辺りは通勤ラッシュのサラリーマンで賑わっていた。朝のヒヤリとした空気が僕達を包んだ。

母の格好は多少目立った。だが、水商売の人だと考えれば職務質問するほど怪しくもない。だから母は、誰に声を掛けられることなく、切符を買った。

そのまま、改札機を通る。ホームへ行くと思ったが、母は女子トイレに向かった。母の顔は魂が抜かれたかのように、干乾びていた。砂漠のように生命を感じさせない目をしたまま、母は俺だけをトイレの個室の中に入れた。

「お母さん？ 別に僕、トイレじゃないよ」

母はにこりと笑った。久々に見る笑顔だった。しかし、なぜか胸騒ぎを覚えた。予感がした。これから、圧倒的に鮮烈で劇的なことが起こる、という予感だ。すぐに個室から出ようと思った。しかし、母はすぐに扉を閉じた。開けようとしても自分の力では開かない。何か突っかかるものを扉の前に置いたのだろう。

「お母さん！ 開けてよ！ 怖いよ！ ねえ、お母さん！ お母さん！！」

必死で叫んだ。言い知れない黒く塗りつぶされた闇が僕の目前まで迫っている。逃げなければいけない。ここで母を引き止めなければ、僕が死んでしまう。それくらいの危機が迫っているように感じた。

しかし聞こえてきたのは、母が走り去る靴音だった。

「待ってよ、お母さん！ おいてかないで、僕も、僕も連れてっ

て!!」

三十分後。僕は若い女の人に発見された。駅員が驚いた顔で僕を抱きかかえてくれたのを覚えている。僕はしばらく何も喋れる状態ではなかったのだが、幼稚園鞆の中にあつた母子手帳のおかげで、名前や住所がすぐに分かった。なので、僕はしばらくして駅員さんに家まで送ってもらうことができた。

僕は、駅員さんの驚いたあの顔をよく覚えていた。そして同時に小声で口から漏れるように出た言葉も、その肉声も、はつきりと鮮明に覚えている。

「この子は、あの人の子どもか……」

駅員さんは母を知っていた。正確に言うのなら、母の見た目だけ。

僕が見つかる少し前、黒いドレスを着た女性が、線路に飛び出し、死んだのだ。

＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊＋＊
＋＊

じいちゃんとの生活は楽しかった。じいちゃんは定年前は小学校の校長をやっていた。知的な目が印象的で、年の割りに若く見える。散歩に出かけると植物の名前や、面白い話をしてくれた。料理や家事も得意だし、何でも器用にこなす。父とは違って、いつも穏やかに笑っている。何故、じいちゃんからあのような父が生まれてきたのか不思議でならなかった。

しかし、そんなじいちゃんが不治の病にかかった。

小学校四年生の時だった。じいちゃんは病院のベッドの上でも穏やかな表情を一度も崩すことはなかった。僕は何日も泣き続けた。そのたびにじいちゃんは、優しく頭を撫でて言うのだった。

「大丈夫。じいちゃんはずっと総夜の近くにいますよ」

「死んじやったら、近くにいけないよ」

僕はベッド横の椅子に座り、すねる様な口調で言い返した。

「そんなことはないさ。家族は死んでも一緒だよ。お母さんも、お父さんも。今は近くにいないけれど、みんな一緒だ」

母は亡くなり、父はそれを気に病み、四年以上入院している。母は好きだった。喧嘩をするときはとても怖かったけれど、おいしいビスケットを焼いてくれたことは今でも覚えている。しかし、父はどうだろう。母は父が殺してしまったようなものだ。恨んでいないといえは嘘になる。というか、とても憎い。父が許せない。父さえいなければ、あんなことにはならなかった。

「だったら僕は、家族と一緒にいたくない」

じいちゃんは悲しそうに笑った。

「恨むなら、僕を恨んでくれ。お父さんを育てたのは僕だ。仕事の忙しさにかまけて、子育てなんてしたこともなかった……。悪い

のは全て、じいちゃんだ」

でも、それでも僕は父を許せない。父のあの冷たい性格は確かに、父子家庭の環境だから確立したのかもしれない。父も父なりの苦勞を背負っているんだろう。しかし、僕はそれで許してやれるほど優しい人間ではなかった。

「でもやっぱり、僕は父さんのことが嫌い」

今考えれば、酷いことを言ってしまったと思う。じいちゃんはきつと落ち込んだだろう。悲しい笑みを浮かべたまま、じいちゃんは続けた。

「嫌いでも、家族なんだよ、総夜。家族なら、助けなくちゃいけない。家族なら、守らなくちゃいけない。それが、家族なんだよ」

「……………」

家族。

僕がよく知らないものだ。嫌いでも、家族。家族なら、助ける。

「約束しておくれ、総夜。家族はずっと、一緒だ」

黒いローブデコルテ（後書き）

自分が可愛いと思って買ったものを「キモ可愛いね」と褒めてもらえます

UZUです（・-・*）

暗くなりました。ファンタジー小説じゃね〜。ですが、人は誰しも過去がありました。それでこそ初めて成立しているわけでした。ただ単に敵を倒すファンタジー小説にはしなくなかったのです。生意気ですね。すみません。でも、総夜は私の言いたいことの媒体でした。大切なわけでした。薄っぺらくしたくなかったわけでした。さてさて、この小説のテーマ、もうお分かりいただけましたでしょうか？ これからもよろしくお願いします。

感想やアドバイスをお待ちしております（。-人-。）

お気軽にどうぞ（・-・）ノ

リバーズハイブン

トースターが俺を呼ぶ声で現実に引き戻された。食パンを二枚取り、皿の上に置く。サンドイッチにでもするかな。冷蔵庫からトマトやらレタスやらを取り出す。しかし、チーズが切れていた。

チーズ……。

なにか引つかかる。頭の裏側がこそばゆい感じた。チーズ、と頭の中で反復する。しかし、やはり思い出せない。駄目だ。やはり、頭を強く打ったようだ。明日の朝すぐに病院に行こう。

「じゃ、俺は帰るから」

坂田さんは黒い鞆を手に取り、玄関のほうへ向かった。ほんと、何しに来たんだのこの人。人の家で買ってきた酒を飲んで帰るって。そう思いながらも、律儀に玄関まで送る俺。我ながら良い奴である。

「じゃ、また来るね」

「来なくていいです。…………あー。でも、まあ、感謝してますよ」

坂田さんは、玄関のドアを半分開いた状態で振り向いた。驚いた顔をしていた。俺は少し恥ずかしかったが、続けることにした。

「一人暮らしをやってけるのは、坂田さんのおかげです。料理とか、家事とか。めんどろな手続きとか、色々教えていただきましたから。まあ、その、何といたしますか、感謝してます」

「はははっ。頭でも打ったの、らしくないね」

「黙っといってください。ああ、言うんじゃなかった」

それでもやつぱり、坂田さんは少し嬉しそうにしていた。礼は言える時に言っておけ、じいちゃんが言っていた言葉だ。

「ま、山下さんにはお世話になったからね」

「…………父さんが？」

「そうだよ。まあ、無口で何考えているのか全然分からなかった

けど。でも、責任を人に擦り付けるのが当たり前の中、あの人は管轄外の部下の責任まで背負って、のた打ち回ってたからね」

「……そうですか」

意外だ。今なら犬は卵から生まれてきますと言われても信じる。

「俺も、その部下の一人だったわけ。だったら、恩返ししねーとって思っただけよ」

「それで、俺の世話を……」

「確かに、お前の親父殿はいつも無表情で冷たそうにしてる人だったけど、今思えば、案外ハートが熱い人だったのかもな」

「………………。そうですか。聞けてよかったです。それじゃ」

「じゃーな」

坂田さんはドアを閉じた。

父が病気になってから、仕事関係の人がたくさん見舞いに来た。父は人と話せる状態ではなかったので面会は断っていたが、果物の盛り合わせを家にわざわざ持ってくる人もいた。好かれていたとは思

わないけど、坂田さんのような親切な人はたまにいた。十二年のときをかけて、俺は父さんのことを少しずつ知りつつあるのかもしれない。

まだ好きにはなれないけれど。

でも、家族なのだから。

家族は、守る。家族は助ける。

それが、死んだじいちゃんとの約束だ。

ダイニングに戻り、サンドイッチを完成させる。ソファにもたれて、窓ガラスを通して青い空を見上げる。澄んだ空には雀が飛んでいた。後頭部がまた痛くなる。針で刺されているようなチクリとする痛みだ。段々とそれが大きくなり、トンカチで叩かれていくような痛みにも目をギョツとつぶる。

おいおい、このまま死んだりするんじゃないだろうな。

思わず、声が漏れた。

「ユズハ……」

ユズハ？ ユズハって誰だ。

自分で言ったことながらも思い出せない。俺にそんな知り合いはいない。いや、ほんとにいないのか？

頭がまだ痛む。それに、やはり俺は何かを忘れている。重要なことだ。俺はすぐにそれを思い出さなければならぬ。急かされるような気分になる。答えが近づいているという感覚が確かにあった。

自転車に乗ってこけた、そして男に襲われた。

その状況が目の前に再生される。ところどころに靄がかかった映像だ。男は燕尾服を着ている。そして、背が高い。体付きもしっかりしていて……。顔は、顔は確か……。

「狼だっ たんだ……！！」

俺は思わず立ち上がった。持っていたサンドイッチが床に落ちる。しかし、それは些細なことである。

そう。俺は魔王を助けるために、異世界に呼ばれたのだ。そして、そこで攻撃を受けた。気がついたら、記憶をなくし、元の世界に戻ってきていた。

夢？ そんなはずがない。柚羽の声も、遊やレイ、チーズのことだってしっかりと覚えている。

「気がついちゃったんだね」

「！」

向かいのソファに、魔王が座っていた。先ほどからずっとそこにいたような自然さを纏い、小学生くらいの男の子がこちらを見て、苦笑していた。世界の摂理のように悠然と構えるその姿は、どこにも焦りがなかった。

「僕の魔法を解くなんて、やっぱり総夜君はすごいね」

「魔王！ 何でここに……っていうか、俺は何でここに戻ってるんだよ！？」

俺は机の上に両手を乱暴に置き、食いつくように魔王のほうを見た。魔王は優雅に空を見ながら、俺の質問に答えた。

「君にあらかじめ魔法をかけておいたんだ。危機回避リバースヘイブンっていうんだ。命の危険が訪れたら、記憶をなくし、元の世界に戻ってこれるようにね。もともと全ては僕のエゴなわけだし。さすがに死なせるわけにはいかないし。でも、とつての強力な呪文だから一度しか使

えないけど。それを解いちゃうとは、総夜君、流石だよ」

魔王は子どものように笑みを浮かべる。俺は後半の魔王の茶化しは無視した。

「柚羽は!？」

「柚羽ちゃんにも同じ魔法をかけといたよ、大丈夫」

「じゃあ、チーズと遊とレイは!？」

「遊とレイ？」

魔王は首をかしげる。俺は手短に、北の国の王様が魔王を助けようとしていることや、遊やレイ、つまりは勇者達の話をした。

「そうか、ノエル様は僕のためにそんなことを……。話を聞く限り、遊君って子は大丈夫だと思う。王様もきつと彼に危機回避をかけているはずだから。問題はそのエルフの子とチーズだね。彼らはそちらの住民だから、危機回避の魔法は使えない」

危機回避とは世界間を移動する転送系の魔法らしい。その魔法がかかる条件は、すでに一度でも世界間の移動をしたことがあること。俺は魔王に無理やり、こちらに連れてこられたときにすでに移動を経験済みだったが、元からあちらの世界の住民である、レイとチーズにはこの魔法はかけられないのだ。

柚羽と遊はこちらに戻ってきている。しかし、他の二人は……。

「戻らないと、あっちに！」

魔王は首を横に振る。その目はいつになく鋭く、真剣なものだった。

「ちょっと待って。とりあえず何があったのか教えてよ。総夜君は何で命の危機にまで陥ったわけ？」

俺は面倒さを感じイライラしながらも、ヴィンスと名乗る子どものことを伝えた。それを聞いた魔王は時間が止まったかのように固まった。血の気が引いているのが、傍目からもよく分かった。俺はいつも気楽で笑顔の魔王の雰囲気の変化を見て、言い知れない不安

を感じた。

「お前の元部下だって言ってたけど？」

魔王の顔色は悪いままだが、顔にはうつすらと自嘲ともなんとも取れない薄ら笑いを浮かべていた。

「そう僕の元部下。そして、僕の古い友達だ」

リバスヘイブン（後書き）

朝食はご飯派

UZUです（・・・＊）

時空の話は一番説明が簡単な複数存在ってことにしておきます。

魔王がいる世界もあれば、総夜がいる世界もあり、宇宙が存在しない世界もあり……ということです。

感想やアドバイスをお待ちしています（。 - 人 - 。

お気軽にどうぞ（ ・ ・ ・ ）ノ

神様

古い友達？

ヴィンスと魔王が？

確かに部下とは言っていたが、親しい間柄だったとは思わなかった。あの時、確かにヴィンスは魔王のことを嫌っているような発言をしていた。

「昔の話だよ。今のあいつは、僕を殺したくて仕方がないだろうけど」

「友達なんだろう、なんでそんなこと……」

魔王は妙に清々しい表情で笑った。

「悪いのは僕だから。それに、色々事情が込み入っててね、話すと長くなりそう。だた、ひとつ君に言っておかなくちゃいけない」

魔王の目の色が変わる。何もかもを見透かすような刃物のような

鋭い双眸。少し気おされながらも負けじと俺も、その瞳を見つめ返した。

「彼には勝てない。僕でさえも、彼は止められない」

「そんなに、強いのか」

「うん。だから僕はこう考えている。君の記憶を消して、君は今までどおりこつちで暮らすんだ」

「そんなことできるか！ あつちではレイやチーズが危険な目にあつてる！―」

「君がこちらに来て、三十分。あちらの世界も三十分進んでいる。柚羽ちゃんや遊君が戻ってきて生きているとしても、もう二人は…」

死んでいるかもしれない。

「嘘だろ……」

不安が胸や身体を覆う。身体心が凍っていくような感覚が全身を巡り、足元がぐらりと揺れる。へらへら笑っているレイが、生意

気で弱虫なチーズが、死ぬ？ イメージが広がらない。しかしその言葉の持つ力にねじ伏せられる。

「そういう世界なんだよ。巻き込んだりして悪かったね。僕が悪い。君を呼んだのはちよつした出来心だったんだ」

魔王の口振りはまるで、俺がこの世界にとどまると決定しているかのような感じだった。

「やめろよ。俺は戻る」

魔王は俺の目を見ずに続けた。

「僕は洞窟あふこから出られないけど君から聞いて場所が分かったから、そこへ使いを送る。助けられるか分からないけれど、僕の命に代えても助け出してみせる」

「それじゃ駄目なんだよ！」

「何が？ レイ君もチーズも助かる」

「お前はどつするんだよ！ 仲直りするんだろ！！」

魔王は驚いた顔で俺の方を見た。

「まだそんなことを……。もういいんだよ。僕はそれだけのことをしたんだ」

「関係あるかよ。お前は良い奴だ。誤解されたままで良いのかよ」

「……いいかい、総夜君。僕には、君に命を賭けてまで助けてもらう価値なんてない」

「！」

言葉が出てこなかった。

それは、きっとコイツが抱えているのが余りにも大きかったから。せいぜい十数年しか生きていない俺などが想像もできないほど。コイツが抱える悲しみも、罪も、全て。

でも、それでも。

「助けてもらう価値だ？ ふざけんじゃねえ。それは俺が決めることだろうが！！」

魔王ははつとした顔でこちらを見た。

「お前が過去に何してようが知ったこっちゃねーよ。お前は俺に

とって助ける価値がある奴なんだよ。俺は、家族は身捨てない。家族は助ける」

「総夜君……」

魔王は、心の無しか、目が潤んでいるようにも見えた。俺は唇の端を吊り上げた。

「俺は行く」

「死ぬかもしれないんだよ」

「こつちにいたってどの道いつかは死ぬんだよ」

「……わかったよ」

魔王は頷くと、歌のような呪文を唱えた。すると、身体が海の中で覆いであるような感覚になっていく。

あーあ。

何かカッコつけたこと言っただけ、大丈夫なのか？

自分で言っただけに、そんなことを考えてしまう。

でも、まあ。

間違った選択、ではないと思う。

悔いのない選択なんて、この世にないとは思っけれど。

ベストな選択はできたんじゃないだろうか。

視界ので歌を口ずさみながら微笑んでいる魔王を見て、そう思っ

た。

俺は目を瞑った。

「ここは……」

先ほどまで居た寂れたバーだ。割れた酒瓶からアルコールの匂いがする。人の姿はなかった。レイもチーズも、ブローカー達の姿もない。

「こつちだよ。山下総夜君」

振り向くと、ヴィンスがビリヤード台の上に座っていた。俺は銃を構え、ヴィンスを射るように見た。ヴィンスの口元は嘲るように歪んでいた。

「君は、二万三十六番目の世界から来たんだね。ようこそ、五千六百二十七番目の世界へ。この世界は面白いだろう。僕も魔王も世

界の空間を渡る力を持っているから、さまざまな世界を見てきたけれど、ここよりも面白い世界はないよ」

「この世界が好きなら、なんでこんなことしてるんだよ」

「薬の売り買いなんてしょっぱいこと、僕は命令してないよ。末端の末端が小遣い稼ぎにやってるだけ。今日ここに来たのは、君たちに会いたかったからだよ。二万三十六番目の世界から来た、勇者と魔王の使いにね」

「会ってどうする？ 目障りだから、消すのか？」

ヴィンスは無垢な子どものように、声を上げて笑った。

「そんな勿体無いことはしないよ。それに君たちじゃ、僕は倒せやしない。僕はこの世界の神様だからね」

「神？」

「そうだよ。可笑しいと思わないかい？ この世界は東西南北の国に分かれている。魔王の攻撃により、一時は協力をした四国だったけれど、魔王が去った今、それは壊れそうだ。いまこそ、必要なんだよ。四国をすべる、神様が」

「お前がそれになると？ 寝言は寝て言え」

ヴィンスは俺の挑発に乗ることなく、にこにここと笑うだけだった。

「僕は止められないよ。今日はそれを言いに来たの。まあ、君を殺そうかとも思ったけれど、案の定、危機回避が掛かってたし。それでも、戻ってきた君の馬鹿さを褒め称え、今回は手ぶらで帰ろうと思う」

「待て！ レイとチーズは！？ 俺の仲間は！？」

ヴィンスはビリヤード台の上に立ち上がり、指を鳴らした。まるで透明になっていたものが着色されていくかのように、レイ達の姿が現れた。両手足を縛られた、柚羽と遊もいた。

「柚羽！ 遊！ 何で……」

二人は口に皮ひもを巻かれていて、話すことはできない。「んー！」としか聞こえない。ヴィンスが言った。

「十分くらい前に戻ってきたんだよ。でも、僕は君に会いたかったら待っててもらったの」

「何もしてないだろうな？」

俺の睨むにも屈せず、ヴィンスはケラケラと笑った。

「愚問だね。僕はRPGが好きなんだ。二万三十六番目の世界で作られるRPGは特に面白いよね。魔王はポケモンが好きだったけど、僕はDQとかFFとかの方が好きだったな。ああいうのって、大体冒険のはじめに辛く悲しいことが起きるんだよ。でも主人公と仲間達はめげずに戦うんだ。素敵だよな」

ヴィンスはそれだけ言って、霧のように消えてしまった。

辛く、悲しいこと？

心臓が早鐘のようになる。急いで三人に近づき、縄を解いた。

「おい、大丈夫か？」

レイは気を失って倒れている。水城と柚羽は苦々しそうに顔を俯かせていた。

神様（後書き）

回覧板が、回ってこないよ

UZUです（・-・*）

久々の更新。お久しぶりでございます。

感想やアドバイスをお待ちしています（-人-）

お気軽にどうぞ（・、）ノ

掃灰娘の時計（前書き）

更新遅くなりましたああああああああああ！！

掃灰娘の時計

「タッチダウン 掃灰娘の時計と言つらしい」

遊が俺のほうに手の甲を向けた。砂時計が刺青のように入っていた。可愛いデザインで、周りに小さな小鳥が砂時計の上を旋回している。動く刺青だ。柚羽にも同じ刺青が入っている。

「どうなるんだ？」

「肉眼では見にくいが、砂が少しずつ落ちてきている。全て落ちると、獣になるらしい」

「獣つて……」

遊は淡々とした調子でそういう。今晚のおかずを発表するかのような淡泊さだ。柚羽も少し顔は曇らせているが、取り乱したりはしていない。

「砂時計の大きさを見るに、猶予は一、二年つて所だな」

「チーズ!!」

柚羽のスカートの右ポケットからチーズがあわられた。さっきからそこにいたらしい。

「来るのがおせーよ」

「仕方ないだろ。記憶をなくしてたんだから」

柚羽と遊は戻ったとき、すぐに違和感を感じていた。柚羽は魔王に、遊は王様に返してもらったらしい。二人とも俺と同じように、選択を迫られたが、同じ選択をして戻ってきた。魔王は俺をこちらに戻さないよう、わざと俺に柚羽が戻ってきたことを知らせなかったのだ。

二人とも、つくづくお人好しだ。

「で、黙って何だよ？」

「自我を失うって意味だろ。ランクSレベルのお前らが獣になれば、並みの軍隊一個じゃとても倒せない。厄介なことになる」

チーズはびょんっと、柚羽の手の甲に飛び乗った。

「消す方法は、呪術を施した人間の魔力をなくすことだ。魔力が小さくなると、砂の落ちるペースが遅くなる。魔力がなくなれば、

砂時計も消える」

遊が重々しく口を開く。

「殺すってことか？」

「手っ取り早く言えばな。どの道、殺し合いになることは避けない。お前らが殺生をしない、といってそれを貫くのは結構だが、こればかりは息の根を止めるかない」

「……………本当に、それしかないのですか？」

柚羽だった。自分のことよりも、他人のことを優先する。彼女らしい、発言だった。

「とりあえず、話はここまで！ 掃灰娘の時計のことは、また考えるとしてレイを病院かどこかに運ばないと……………」

レイは先ほどからぐったりとして動かない。呼吸はしていて胸が上下しているが、悪夢にうなされているのか顔色が悪い。

「レイには掃灰娘の時計が描かれていないのか？」

レイの手の甲はいつもどおりの綺麗な白色の肌をしていた。チーズが答えた。

「エルフにはそういうのは効かねーんだよ。でも憔悴しているのは確かだな。エルフは体調管理が苦手な生き物なんだ。もともと森の生き物だから、人間と同じ生活環境だと空気の影響とかで弱る。こいつはまだまだ丈夫なほうみたいだが、人間に比べたら、たいぶ虚弱体質だな」

「よし。遊、レイを担ぐの手伝ってくれ」

「わかった」

レイは頷き、レイの方を自分の首にかける。俺ももう片方の腕を持ち、酒場を出た。

眼を瞑りたくなるような、白。広いその部屋は、白でコーティングされていた。壁に床に、調度品もほとんど白だ。ソファに暖炉、絨毯に等身大の馬の置物。他にもたくさんのが家具が無作為に置かれている。フカフカそうなソファにヴィンスは座っていた。身体が子供なので、ソファに座ると足がつかない。にも関わらず手にとつて読んでいるのは分厚くて小難しそうな古書だった。

「よかったのか？ ヴィンス」

白い部屋の扉が開き、若い男が入って生きた。茶色の髪に、緑の瞳、大人しく知的な印象を与える男だった。そして、その肩には大きな青い鳥が乗っている。ヴィンスは古書をその辺に置いて、ノックもせずには部屋に入ってきた部下のほうにニコニコしながら眼を向けた。

「何が？」

「奴らを解放して。聞けばランクA以上の戦力を誇ると聞いた」

男は向かい合うようにソファに腰掛けて足を組んだ。青い鳥は大きな羽を広げ、部屋に置かれた白色の止まり木の方へ飛んでいった。

「苦難と困難は多いほうが良い。僕らの活動は平和を守るものだ。敵が立ちふさがるのは当然だよ。平和にはいつも黒い影がちらつくものさ」

ヴィンスは鼻歌を歌いだしそんなほど愉快だ、というような顔を
している。男はため息をついた。

「そして俺達は、それを斬る剣か……」

「不満なの？」

「いや、平和のためなら俺は何だってやるさ。そうだろう、イブ
リース卿？」

ヴィンスは鋭く目を光らせ、淡々と言った。

「僕達の足元に道ができる。だからこそ僕等は歩き続けなくて
はならない。例えばそれがどんな茨の道でもね」

「あれ？ どこそこ？」

「病院」

レイの目が覚めた。ここは宿屋のすぐ近くにある小さな自営業の病院だ。ベットが二つしか置かれていない小さな部屋に俺達はいた。看病疲れなのか、柚羽と遊はレイのベットにもたれるように寝ていた。

あれから、丸一日たった。二人に目に見える変化はないが、チーズが言うには身体の気力を植物の根のように少しずつ吸われていくらしい。二人も口には出さないが、負担は相当だろう。

「僕がいながら、不甲斐ない」

レイはうつむき加減にそういった。俺は首を横に振った。

「やめろよ。俺だつて来るのが遅くなった。悪いのは俺だ。お前が助かってくれてよかった」

レイはいつものように笑ってはいなかった。綺麗な瞳には穏やかな表情で眠る二人を捕らえていた。

「お前も、そんな顔するんだな。ただいつも笑っているだけの能天気な奴だと思ってた」

「……総夜。僕も傷付くんだよ」

三日後。俺たちは回復したレイを連れて荷物を取りに宿へ戻った。

「もう行っちゃうの？」

玄関先でサラが俺の脚を掴んだ。隣にはセドリックもいる。

「ああ。大事な仕事があるからな」

「気をつけてね」

セラが不安げな声を出す。おばさんと柚羽たちは談笑している。俺はそっと二人に話した。

「家族は大事にしろよ。おばさんのこと困らせるなよ、セラ」

セラはまじめな顔で頷いた。

「セドリックはセラを守ってやれ」

セドリックも頷く。俺は満足げに笑った。

「……なあ、魔王って知ってるか？」

セドリックは首をかしげた。

「悪い人でしょ。知ってるよ」

「俺の家族だ」

二人は目を丸くした。

「血はつながってないけど、大切な人。今は良い人なんだ」

セラが上目遣いに尋ねる。

「ほんと？」

俺は微笑んだ。

「余り人には言わないほうが良いかもしれないけどな。ただ、知ってて欲しいだけだよ。いつか魔王が良い人だってことは世界中に広まる。だからそのときは素直にそのことを信じて欲しい。それだけだ」

二人は笑った。

「うん！」

「信じる！」

「約束だ」

三つの拳をこつんと合わせる。

「総夜！ もう行くぞ！！」

遊の声が聞こえた。もう行かなくてはならない。俺たちは一つ目の街を去った。

勇者の秘密とお姉さま（前書き）

UZUです。お久しぶりです！待っていてくれた方がもしいたのなら、遅くなつてすみません！！

勇者の秘密とお姉さま

自分のことが大嫌いです。今も昔も。

「これ、そのような粗末なものに触ってはなりません」

庭先で見つけた野良猫。可愛いから触ろうとした私に母は鋭くそうお叱りになりました。従順な私はそれに従いましたが、何だか後ろ髪を惹かれる思いでした。

朱雀河原の名を背負ったときから私の人生は決まっていました。学校に結婚、隠居後の別荘まですべて抜かりなく完璧に。手配された友達と親しくなり、丁寧な言葉で距離をおいて話す。私の周りはずっと造花で囲まれていたのも同然でした。虫も寄ってこない綺麗な花。ですが、それでも私はその造花が羨ましく思えました。彼らは私との会話を終えればもとの生花に戻るのです。私を構う時だけ造花になればいいのですから。しかし、私は違う。私は造花でも生花でもなかったのです。枯れた花。蕾のまま枯れた出き損いにすぎません。

ある日私は、本邸に呼ばれました。母さま直々に話があるとのことでした。会うのは五ヶ月ぶりです。どこまでも広がる畳の部屋に二人。庭の獅子脅しが鳴り響きます。

「結婚相手が決まりました」

淡々と母さまはそうおっしゃいました。私は頷きます。何の感慨も沸きませんでした。好きな人もいませんでしたから。

「これも、貴方のことを想ったことよ」

母さまの甘ったるい香水の匂いがしてきました。私がこの世でもっとも苦手な香りです。

「……はい。わかっております母さま^{かあ}」

人は愛を与え、与えられる。

別に誰かに愛されたいというわけではない。私のような存在が愛されて良いはずがない。しかし、私は誰かを愛することができない。家族を恨み、友を信じようとしない。私は人に愛を与えられない。優しくできない。

政略結婚に愛など不必要だということは両親を見て知っていました。それでも私は自分は両親とは違うのだと思ってきました。けれど結局、私も両親と同じ。生きているのに死んでいるも同然。

いつからだろうか。上手く笑えなくなってしまったのは。

「愛してるわよ、柚羽さん」

「はい」

庭の壁の上を野良猫が通っていきました。追いかけたいとほんの少し思った自分がいました。

「!!」

私は気が付きました。私はまだ、染まっただけではない。私は、両親とは違う。

「どこに行くのですか!!」

私は駆け出していました。猫を追いかけるために。自分を変えるために。道路に出て走り、私は何とか猫に追いつきました。猫は男性の腕の中に飛び込みました。燕尾服に狼の被り物をした男性です。男性は言いました。

「試すようなことをしてすみません。でも変わりたいのですね、貴方は」

私は驚いて何も答えられませんでした。なぜそんなことが分かるのかとか、なぜ被り物をしていらっしゃるのかだとかたくさんの疑問が出てきます。しかし次の一言で全て吹き飛んでしまいました。

「こちらへ来たら何か変わるかもしれません」

「本当、ですか……?」

私を敬称で呼んだりしない、普通の人と接することができるのだろうか。私が普通になれるような世界があるとしたら。

「連れて行ってください」

私が誰かに優しくできるとしたら。

人々の喧騒がする。噴水や道の端に小川が走っている綺麗な街だ。次の街、アクアラインである。綺麗な青空に白と青を基調とする建物がよく生える。俺達は、アクアラインで一番食べ物が美味しいという宿屋に泊まった。もちろんここが良いと言い出したのはチーズである。

「うまうまうまうまうまうまうまうま」

そう言っ Cheese は部屋に置かれているクッキーをもぐもぐと食べている。絨毯も小奇麗で綺麗な部屋だというのに、雰囲気がち壊した。部屋割りは一室。無論俺達、男衆が言い出したのではない。金銭的な面を考慮して柚羽が言い出したのだ。俺と柚羽は金なんて持ってないし頼れるのはレイと遊なのだが、二人が王様からもらった金も尽きてきている。……年頃の女の子と同じ部屋。ここに泊まって三日になるが命をかけて神様と俺の良心に誓うが手を出したりなんかしない。別にときどきしてなんか、いらない。

「……あれ、みなさん朝が早いんですね」

朝の7時くらい。まだ太陽は出ていない。柚羽はもぞもぞとベットから出てきた。俺と遊はすでに起きていた。男ではないがレイも起きている。エルフは早起きな生き物らしい。

寝れるわけねえだろ……。

というのが、俺の正直な感想である。いくら違つベットとはいえ、同じ空間にいただけで息がしづらいくらいだ。そんな俺達を知ってかしらるか、柚羽はいつもの無表情だ。しかし、寝起きだからか少し目がとろんとしている。

……………可愛い！

って何を言い出すんだ俺は！！

「ま、まあな。早く目が覚めたから」

「……そうですか。私、シャワー浴びてきますね」

柚羽は立ち上がり部屋を出ようとするが、壁に衝突した。朝がすごく苦手なようだ。

「大丈夫、柚羽さん？」

遊が本当に心配そうな顔をした。レイがくるくると回り女の子へ変身すると、柚羽の肩を支えた。

「私が一緒に行つて来るわ。お風呂にも入りたいし。それなら安心でしょ」

艶のある女性の声である。柚羽は思考能力が低下しているのか、素なのか、たぶん後者だが頷いてそれを了承した。しかし、安心できるわけがない。

「いいわけねえだろ！！ お前半分は男だろ！！」

レイが聞き捨てならないという顔で俺に近づいてくる。俺はベッドをソファ代わりにして座っていたのだが、レイが押し倒さんとするかのように迫る。豊満な胸と、白い足を見せ付けてくる。色気が100%どころかメーターをぶつちぎっている。俺は思わず身を反らした。息が止まってしまふくらいの綺麗な唇がにたりと笑う。

「私が何ですって？」

「綺麗なお姉さまです！！」

レイは満足した表情で柚羽を連れて部屋を出て行った。遊が飽きた様のため息をついた。

「悪いな。ああやって遊ぶのが好きなんだよ。僕といた時も8：2で女の姿だった」

「喜ぶべきところではないらしいのは確かだな」

毎回あんなやり取りをしていたら精神的にもたない。

「でも、良いのか遊？ あいつ、美人を見ると性別が変わるんだ

る」

クッキーを口にしながらチーズが言う。

「それは言葉の綾だ。美人を見ても自制は利く」

「ならよかった。好きな女に手を出されちゃたまんねーからな」

「好きな女！？ ということだ、それは！！？」

遊は古典的にも椅子から転げ落ちた。俺とチーズは首をひねる。

「だってお前、柚羽のことが好きなんじゃ」

「そんなことはない！」

反応を見るに、照れ隠しというよりは本当に好きではないらしい。

「でもお前、柚羽姐さんと話してるときテンパってたじゃねーか」

「あれは違う！ あれはだな……………」

遊は言い難そうにした。何か特別な事情でもあるのだろうか。

「別に嫌なら言わなくてもいいよ、遊」

俺はそついうが、遊は首を横に振る。

「いや、いつかは知られてしまうことだし。このままでは柚羽さんに嫌な思いをさせてしまうかもしれないしな」

「……………」

「僕は……………女性恐怖症なんだ」

「女性恐怖症！！！？？」

チーズが大きな声を上げる。続けて俺も叫ぶ。

「勇者なのに！！？ 選ばれし者なのに！！！？」

「静かにしたまえ！ そうだ。僕には姉が五人いて幼少から女性というものに恐怖を抱いているっ！ 柚羽さんがそんな人ではないと分かっているが、僕には耐えられない……」

なるほどな。それならレイもからかい甲斐があるというものだ。

「レイなら少しは耐えられるが、あいつのせいでこの病気が酷くなっている気もしないでもない……」

「お前の推測はたぶん正しいだろうな」

どこにでもいる高校生。超絶美人なポーカーフェイス。両性類で押しの強いエルフ。女嫌いな勇者。非常食兼悪魔。

相変わらず、俺たちの旅は前途多難らしい。

勇者の秘密とお姉さま（後書き）

感想＆評価、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8718r/>

魔王のイメージアップのために異世界に召喚された話

2011年10月2日16時04分発行